

見前中島遺跡

Mirumaenakajima Site

—第3次調査 宅地造成に伴う発掘調査報告書—

2023. 3

株式会社アスエステート

盛岡市教育委員会

見前中島遺跡 発掘調査報告書

—第3次調査 宅地造成に伴う発掘調査報告書—

2023. 3

株式会社アスエステート
盛岡市教育委員会

例 言

- 1 本書は、岩手県盛岡市西見前^{にしきみまえ} 14 地割地内に所在する、文化財保護法に基づく周知の埋蔵文化財包蔵地「見前中島遺跡」における、株式会社アスエステートによる宅地造成に伴い盛岡市教育委員会が実施した発掘調査の報告書である。
- 2 令和 4 年(2022)年 4 月 12 日に、届出面積 4,052.48m²を対象に試掘調査を実施した。その結果、遺構遺物を確認したため、株式会社アスエステートと盛岡市が締結した契約書に基づき、第 3 次調査として同年 6 月 1 日から同年 8 月 10 日に本調査を実施した。野外調査、整理作業、報告書刊行等の直接経費は、株式会社アスエステートが支出した。
- 3 試掘調査(第 2 次調査)は、盛岡市教育委員会歴史文化課埋蔵文化財担当遺跡の学び館の文化財主査 今野公顕、文化財主事 今松佑太、本調査(第 3 次調査)は同今野公顕、文化財主事 杉山一樹、文化財調査員 佐々木あゆみが担当した。本書の執筆編集は、今野公顕、佐々木あゆみが、遺跡の学び館埋蔵文化財担当職員と協議の上、担当した。
- 4 遺構平面位置は、平面直角座標系第 X 系を用いた調査座標で表示した。
遺構等の高さは、標高値をそのまま使用した。
調査座標原点 X-39,600 m、Y+28,400 m(世界測地系第 X 系) = $RX \pm 0$ 、 $RY \pm 0$ (調査座標値)
- 5 土層断面図は、堆積の仕方を重視し、線の太さを使い分けた。層相観察には「新版標準土色帖」(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)を使用した。
- 6 本書で用いる遺構種別ごとの略号は、次のとおりとした。
・竪穴建物跡(カマドあり): R A ・掘立柱建物跡: R B ・土坑: R D ・溝跡: R G
- 7 本書で用いる遺構平面図の線種は、次のとおりとした。

区別	線種
検出	———
推定・オーバーハング	-----
時明差	-----

- 8 竪穴建物跡の遺物取上時の平面位置は、遺構長軸短軸方向に設定した埋土断面観察ベルトによって、北東部は N E、南西部は S W など、四分割の位置で表した。床面直上出土のものは番号を付して平面位置を記録した。
- 9 カマド方向は、カマド本体焚き口の中心と煙道先端煙出し部の中心を結んだ線の方向の傾きとした。
- 10 掘立柱建物跡の方向は、梁行の中心を結んだ線の方向の傾きとした。
- 11 古代の土器は、土師器・須恵器・あかやき土器に分類した。あかやき土器の名称は、回転台使用成形の酸化炎焼成土器に使用した。回転台使用成形で内面黒色処理がある酸化炎焼成の坏類は、土師器に分類した。
- 12 出土遺物の写真撮影は佐々木あゆみが行った。
- 13 空中写真撮影及びオルソデータ作成は、株式会社タックエンジニアリングに委託した。出土した木、炭化物、火山灰の科学分析は、株式会社加速器分析研究所に委託し、その結果を第 4 章に掲載した。
- 14 第 1 図は国土地理院長の承認を得て同院発行の 5 万分の 1 の地形図を複製した盛岡市管内図(承認番号平 17 東掖第 215 号)を利用した。第 3 図、第 4 図は、岩手県の承認を得て岩手県所有の盛岡広域都市計画図(1/2,500、1/10,000)を複製したものを使用した(承認番号平成 29 年 8 月 21 日岩手県指令部第 85 号)。
- 15 発掘調査に伴う出土遺物及び諸記録は、盛岡市遺跡の学び館にて保管している。
- 16 次の諸氏に発掘調査及び本書作成にあたり多大なる御協力を頂いた。記して感謝申し上げる。(敬称略) 佐々木 忠志、和野町内会、近江 俊秀(文化庁)、鈴木 拓也(近畿大学)、永田 英明(東北学院大学)、西野 修(矢巾町)、盛岡市見前南公民館
- 17 調査成果報告は、説明会資料や既報告等より本書の内容が優先する。

目次

第1章 経過	第4章 科学分析
1 調査に至る経過・・・・・・・・・・・・・1	1 放射性炭素年代測定・・・・・・・・・・・・・26
2 第3次調査の発掘作業・整理作業の経過・・・・1	2 樹種同定・・・・・・・・・・・・・27
3 体制・・・・・・・・・・・・・2	3 火山灰同定・・・・・・・・・・・・・30
第2章 位置と環境	第5章 総括
1 地理的環境・・・・・・・・・・・・・3	1 調査のまとめ・・・・・・・・・・・・・33
2 歴史的環境・・・・・・・・・・・・・7	2 並行するRG03・04・07溝跡について・・・・33
3 これまでの調査・・・・・・・・・・・・・9	写真図版・・・・・・・・・・・・・35
第3章 調査成果	報告書抄録
1 調査の方法・・・・・・・・・・・・・10	
2 基本層序・・・・・・・・・・・・・10	
3 遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・11	

表目次

第1表 見前中島遺跡発掘調査実績・・・・・・・・・・・・・9	第7表 放射性炭素年代測定結果 ($\sigma^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年 校正用 ^{14}C 年代、校正年代)・・・・・・・・・・・・・28
第2表 見前中島遺跡第3次調査 基本層序・・・・10	第8表 樹種同定結果・・・・・・・・・・・・・29
第3表 溝跡一覧表・・・・・・・・・・・・・14	第9表 テフラ分析結果・・・・・・・・・・・・・31
第4表 土層観察表・・・・・・・・・・・・・14	第10表 溝跡間隔・・・・・・・・・・・・・33
第5表 出土遺物一覧・・・・・・・・・・・・・17	
第6表 放射性炭素年代測定結果 ($\sigma^{13}\text{C}$ 補正值)・・・・28	

図目次

第1図 見前中島遺跡と周辺遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・3	第10図 北区(3)・・・・・・・・・・・・・23
第2図 地形分類と主な遺跡の分布・・・・・・・・・・・・・5	第11図 南1区・・・・・・・・・・・・・24
第3図 見前中島遺跡と周辺の遺跡分布図・・・・・・・・・・・・・6	第12図 出土遺物・・・・・・・・・・・・・25
第4図 見前中島遺跡 全体図・・・・・・・・・・・・・9	第13図 暦年校正年代グラフ(参考)・・・・・・・・・・・・・28
第5図 第3次調査全体図・・・・・・・・・・・・・18	第14図 軽石・火山ガラスの屈折率・・・・・・・・・・・・・31
第6図 RA01 竪穴建物跡・・・・・・・・・・・・・19	第15図 テフラ・砂分の状況・・・・・・・・・・・・・31
第7図 RBO1 掘立柱建物跡・グリッドピット・ RD01 土坑・・・・・・・・・・・・・20	第16図 樹種同定 炭化材・・・・・・・・・・・・・32
第8図 北区(1)・・・・・・・・・・・・・21	第17図 樹種同定 木材(試料5-1)・・・・・・・・・・・・・32
第9図 北区(2)・・・・・・・・・・・・・22	第18図 溝跡新旧関係・・・・・・・・・・・・・33
	第19図 RG03・04・07 溝跡模式図・・・・・・・・・・・・・34

写真図版目次

第1図版 遺跡周辺の空中写真比較・・・・・・・・・・・・・8	第4図版 遺構(1)・・・・・・・・・・・・・37
第2図版 調査区全景写真(1)・・・・・・・・・・・・・35	第5図版 遺構(2)・遺物・・・・・・・・・・・・・38
第3図版 調査区全景写真(2)・・・・・・・・・・・・・36	

第1章 経過

1 調査に至る経過

(1) 第2次調査（試掘調査）

令和4年3月11日、株式会社アスエステートから盛岡市教育委員会歴史文化課埋蔵文化財担当の市遺跡の学び館に、周知の埋蔵文化財包蔵地「見前中島遺跡」内の水田における宅地造成計画に係る発掘届の提出があった。市遺跡の学び館は、対象面積が約4,000㎡超と広大であることや周辺の調査事例が少ないことから、遺構遺物の有無を確認する試掘調査実施の旨を添え、同年3月22日付けで岩手県教育委員会へ進達した。(株)アスエステートに、同年3月25日付けで岩手県教育委員会から試掘調査及びその結果を基に対応する旨の通知が出された。これに基づき、事業主負担によって市遺跡の学び館は同年4月12日に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、竪穴建物跡、溝跡、古代の土師器破片等が出土したことから、遺跡の学び館は同年4月15日付けで(株)アスエステートへ試掘調査結果を報告し、今後の取扱いを協議した。

(2) 第3次調査（本調査）

同年4月22日付けで(株)アスエステートから市教育委員会に、発掘調査業務委託経費見積書提出依頼があり、市教育委員会は(株)アスエステートに同年4月26日付けで経費見積書・工程表・発掘調査計画書を提出した。これを受け、(株)アスエステートは盛岡市及び市教育委員会に発掘調査業務委託依頼書を提出し、同年5月12日付けで発掘調査業務委託を締結し、市教育委員会遺跡の学び館は同年6月1日に発掘調査に着手した。

2 第3次調査の発掘作業・整理事業の経過

(1) 発掘作業の経過

市遺跡の学び館は、各受注者と同年5月27日に現場事務所用地等整備業務委託、5月30日に仮設トイレ等賃貸借契約を締結した。同年5月下旬に現場周辺住民や学校、公共施設等に発掘調査着手のお知らせを配布し、同年6月1日から発掘調査に着手した。バックホー0.45㎡、キャリアダンプ6tによる表土除去、現場機材置き場や駐車場用地に鉄板敷設、コンテナハウス、仮設トイレ、テントを設置し、作業開始した。同年6月17日、駐車場が手狭なため、市教育委員会生涯学習課に見前南公民館駐車場利用の協力依頼をした。

同年7月5日、RA01 竪穴建物跡の一部が西側現道路の法面下に広がること、RB01 掘立柱建物跡の広がりを確認する必要が生じたことから、業務委託によりバックホー0.12㎡で調査区域の一部を西へ拡張した。

同年7月4日に受注者と空中写真撮影及びオルソデータ作成業務委託を締結した。

同年7月11日に地元和野町内会婦人部の依頼を受け、見つかった遺構の説明や地域の歴史に関する講話を、調査現場と同町内会公民館にて開催した。「このような歴史が近所にあったことは知らなかった」などの感想が聞かれた。

同年7月21日に、残土反転前の空中写真撮影を実施した。同年7月26～28日に、バックホー0.45㎡とキャリアダンプ6tにより、残土反転と南1区の表土除去を行った。

同年8月5日に、夏休みの子供会行事として依頼を受け、遺跡見学会と調査作業体験会を用意した。しかしあいにくの雨天であり、新型コロナウイルス感染症も拡大していたことから、調査区隣接在住家族1組(中学生、小学校高学年、保護者)のみが来訪し、コンテナハウスの中で出土遺物や図面、写真などを見せ説明した。子ども達も保護者も興味深そうに見学してくれた。

同年8月8日に、南1区および残土下だった範囲の空中写真撮影を行った。

同年8月9日に現場機材を撤収した。同年8月10日に4月の試掘調査において、低湿度で遺構遺物が存在しないと判断していた範囲の試掘調査を行い、遺構遺物がないことを確認した。同日午後(株)アスエステ

第2章 位置と環境

1 地理的環境

(1) 位置 (第1図)

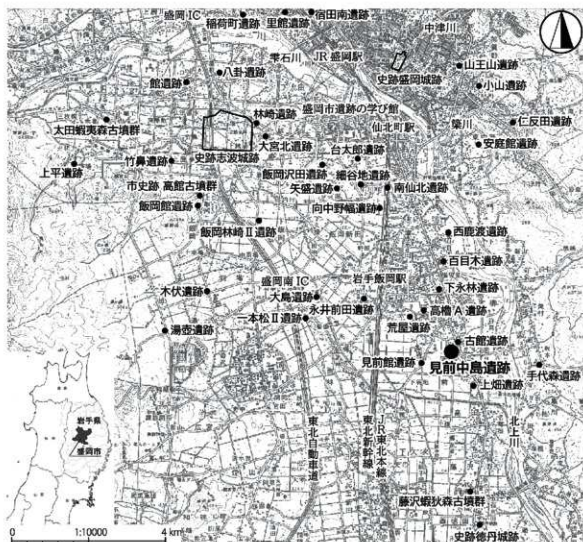
見前中島遺跡は、岩手県盛岡市西見前第14地割地内に所在する。

盛岡市は、岩手県の内陸部中央北寄りに位置する県庁所在地である。人口は282,960人(令和4年12月末日現在・住民基本台帳登録人口)、面積は886.47㎢である。

東の北上山地と西の奥羽山脈の間を南へ流れる北上川が作り出す北上盆地の北端に位置する。

本遺跡は、市南部の旧都南村域に位置する。北上川西岸に広がる平野部に位置し、北上川は遺跡の東約1kmを南流している。J R岩手飯岡駅から南東約2kmに位置する。

遺跡範囲は東西約218m、南北約115m、総面積約20,425㎡と想定され、標高は約111mである。



第1図 見前中島遺跡と周辺遺跡位置図 (1:100,000)

(2) 地形・地質 (第2図)

盛岡市は、東北地方太平洋側の北上山地と奥羽山脈の間を南に貫流する北上川によって形成された北上盆地の北端に位置する。北上川は岩手県北部の岩手町を水源地とし、宮城県石巻市で太平洋に注ぐまで、多くの河川と合流し水量を増していく。北上川に合流する最初の大きな河川であるルフィシロ川と北上山地から西流する中津川等が盛岡市域で合流し、それ以南には幅広い平野部を形成する。

雫石川は奥羽山脈から東進し雫石盆地を形成するが、鳥泊山と箱ヶ森に挟まれた繫北の浦付近で急激に流路をせまめられ、その狭窄部を抜けて北上盆地に入り、北上川と合流する。狭窄部以西では多くの小河川をあわせ雫石川水系を形成し、水量を豊かにして狭窄部につきあたる。その勢いで狭窄部付近に土砂の沈下堆積が生じ、狭窄部以東の平坦な地形と合わせ、流路転換の原因となっている。この流路転換は現雫石川の南岸で行われ、北岸はほとんど雫石川の河道になっていない。北岸に岩手山を供給源とする火山砕流堆積物と火山灰層をのせる台地が発達していることによる。

狭窄部以東の南岸には雫石川の旧河道が幾筋も認められ、沖積段丘(砂礫段丘)が発達する。沖積段丘は水成砂礫層を基底に、その上に水成シルト、表土が覆う。基本層はおおむねこの3層に分けられるものの、砂礫層の上面高は一定せず、層厚や層相も地点によって異なり、近接地点で大きく相違することもある。シルト層内に腐植土(あるいは火山灰)を介在する地点もあり、長期にわたる堆積とみられる。このシルトは旧河道ばかりでなく、微高地などにも堆積している。

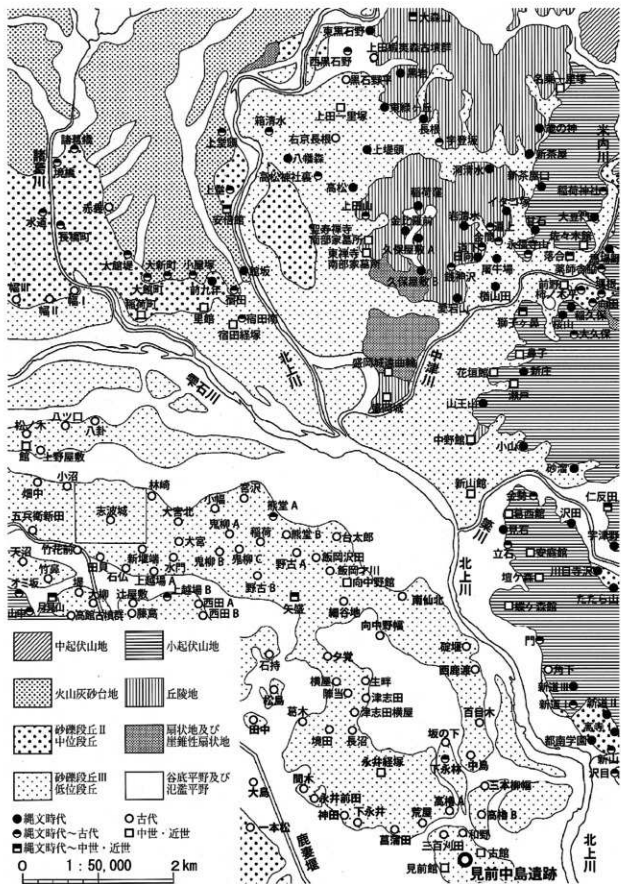
雫石川の旧河道は連続する大きなものが4条あり、そのほか細かな網状のものも多くみられる。大きな旧河道の南岸には比高差の小さい河岸段丘が形成される。南から現河道に向かって低くなることから、河道が北進したことを示し、網状の細かな旧河道は複雑な河道の変遷を示す。沖積段丘は雫石川に周辺山地から供給される砂礫やシルトによって堆積され、さらに河道の定まらない雫石川による下刻や堆積がくり返されたと言え、常に河川の影響を受けた不安定な地形であったと言える。

この段丘面上には、本遺跡をはじめとした多くの奈良・平安時代以降の遺跡が分布し、水成シルトが平安時代前半の竪穴住居を埋没させている例もある。また、水成シルト層は地点によって薄い遺物包含層を形成していることもあり、縄文時代の遺物がまれに出土する。網目状に確認される旧河道には、水成砂礫層上面に水成堆積の黒色土が堆積し、グライ化層、粘土層が形成されることもある。雫石川と北上川の氾濫の影響を受け、水成シルト層の一部に砂礫が形成されている場合もある。

(3) 景観

本遺跡周辺からは、北の左側に岩手山、右側に姫神山、北遠方にナカノ山七時南山、西に秋田駒ヶ岳、南東に早池峰山を望む。その手前には、東に北上山地、西に飯岡山から南昌山に続く山地が南北に連なる。南方は北上川西岸にそって延びる平野が続き、紫波町の城山(高水寺城跡)などを望む。

昭和23年の米軍撮影航空写真(第1図版)では、田畑が広がり、住宅等が散在する様相がうかがえ、近世以来の農村地帯であったことがうかがえる。東に近世以降の奥州街道である国道4号線、西にJ R東北本線と東北新幹線が南北に延び、幹線沿いの農村地帯と言える。現在では、本遺跡周辺や西方は昭和30年代に圃場整備がされた水田が整然と広がるが、周囲は宅地が広がる。南の矢中町の再開発に伴い、宅地化が進んできている。その宅地の間に農地が点在するが、それらが年々宅地等へと開発が著しく進んできている地域である。



第2図 地形分類と主な遺跡の分布

(4) 周辺の遺跡 (第1・2・3図)

本遺跡周辺には、古代以降の遺跡が多く分布する。代表として、本遺跡から約7km北西には延暦22(803)年に古代律令政府によって造営された古代陸奥国最北端の城柵跡の国史跡「志波城跡」(中太田方八丁地内)、南約3.8kmには志波城跡が廃絶され移転した「徳丹城跡」(矢中町西徳田地内)がある。志波城跡より南東の平野には、大宮北遺跡、小幡遺跡、野古A遺跡、飯岡沢田遺跡、飯岡才川遺跡、台太郎遺跡、向中野館遺跡、細谷地遺跡、矢盛遺跡など、盛南地区遺跡群と呼んでいる古代以降の集落遺跡が立地する。これらは主に、7世紀後葉から10世紀代の集落跡、墳墓群(飯岡沢田遺跡、飯岡才川遺跡)、2間2間の総柱建物跡からなる倉庫群(飯岡才川遺跡)、掘立柱建物跡や竪穴建物跡からなる拠点的な集落(林崎遺跡、大宮北遺跡、小幡遺跡)、そして中世以降の豪族居館(台太郎遺跡、向中野館遺跡、矢盛遺跡)、近世から現代に続く農村集落跡である。

本遺跡は、北上川西岸に位置する古代以降の集落遺跡である。本遺跡のほか、西鹿渡遺跡、百目木遺跡、下水林遺跡、高槽A遺跡、荒屋遺跡、上畑遺跡などが、北上川に沿って南北に連なる。これらは主に8~9世紀を中心とした集落遺跡である。8世紀代は、一辺5m超の大型竪穴建物跡と4m以下の中型、3m程度の小型の竪穴建物跡数棟からなり、当該期の典型的な集落跡といえる。下水林遺跡は8~9世紀の円形溝溝(墳墓)約40基からなる周辺集落の墓域と考えられる。高槽A遺跡は、8世紀後半から9世紀初頭を中心とした竪穴建物跡34棟などを調査し、土製紡錘車14点などが出土している。上畑遺跡では9世紀後半代の集落跡が確認されている。西方には、9世紀前葉の飯岡林崎Ⅱ遺跡、9世紀~10世紀半ばの地域拠点集落のひとつと考えられる大島遺跡、その西側台地上に立地する8世紀後半~10世紀前半の一本松Ⅱ遺跡が立地する。

また、本遺跡西方の見前館遺跡は、戦国時代の斯波氏家臣の見前氏、斯波氏滅亡後には南部氏配下の日戸氏の居館跡と考えられ、掘立柱建物跡群が検出されている。



第3図 見前中島遺跡と周辺の遺跡分布図

2 歴史的環境

本遺跡などが立地する沖積段丘上には、縄文時代～古墳時代の遺構遺物の発見は少ない。遺跡の多くは7世紀中葉以降の古代の集落遺跡を中心に、中世の居館跡、近世の集落跡などである。

縄文時代の遺跡は、盛南地区遺跡群の本宮熊堂A遺跡や台太郎遺跡において、晩期の竪穴建物跡や遺物包含層が確認されている。詳細な時期は不明だが、同地区の飯岡才川遺跡、細谷地遺跡などでは、陥し穴が旧河道沿いにまとまって確認されている。弥生時代の遺構遺物は、弥生時代前期頃の土器埋設遺構が台太郎遺跡で確認されているほか、弥生時代後期の土器片や北海道系の続縄文土器片が台太郎遺跡や細谷地遺跡からわずかに出土している。古墳時代の遺構遺物はほとんど出土例がない。

7世紀中葉以降の遺構遺物は、竹鼻遺跡（上座妻）や台太郎遺跡（向中野）において確認されており、以降現代まで集落が立地し、平野部における農耕を主体とした暮らしが営まれてきた土地といえる。

奈良時代の8世紀以降、竪穴建物を主体とした集落遺跡が増加する。この時期の集落は、大型竪穴建物跡を中心に、中～小型の竪穴建物跡が数棟ずつまとまって分布することが多く、血縁関係を持った一族が集落を構成した部族社会だったと考えられる。

古代日本の律令制度に基づく国家は、天皇を中心とした政府が全国の土地や人民を直接統治した中央集権体制であったが、当初東北地方北部にはその統治範囲の外で、人々は「蝦夷（エミシ）」と呼ばれた。政府は東北地方へ勢力を拡大する政策をとっており、「城柵」を拠点とし、関東地方などから移民（編戸）を送り込む同化政策をとった。城柵は、政府が東北地方に造営した軍事と行政を司る官衙（行政府）の一種である。城柵では、酒宴を伴う儀式で蝦夷をもてなし懐柔する「饗給」、蝦夷の動向を探る「斥候」、反抗する蝦夷を武力で制圧する「征討」などの機能を担い、蝦夷に対し天皇の威厳を示す政府の対蝦夷政策と地域支配の軍事と行政の拠点だった。この過程で、政府は蝦夷と激しく争ったり、城柵の役人に登用したりしたことが、文献史料に記録されている。文献史料によれば、8世紀後半の盛岡周辺は「志波村」と呼ばれていたと考えられ、出羽国の政府軍と戦ったが、その後志波村の蝦夷は律令政府側についたことが記録されている。この頃、政府軍を破った胆沢（岩手県奥州市付近）の蝦夷アテルイは、胆沢城を造営した征夷大將軍・坂上田村麻呂に降伏した（延暦21(802)年）。その翌年、延暦22(803)年、桓武天皇の命を受けた坂上田村麻呂によって、本遺跡の約7km北西に「志波城」（盛岡市下太田方八丁ほか）が造営された。

志波城は、城柵のひとつである。発掘調査成果などから、古代陸奥国最北に位置し最大級規模の城柵であった。志波城は、その北を流れる壺石川の度重なる氾濫被害と、桓武天皇の徳政相論の結果を受けた行財政改革により、造営後約10年で文室麻呂によって志波城の南約10kmに規模や機能を縮小した「徳丹城」（矢中町西徳田）が造営され機能を移転した。徳丹城は9世紀半ばまでには廃絶され、岩手県域は胆沢城一城による統治体制になり、地域社会が再編されていったと考えられる。

徳丹城が廃絶され胆沢城一城体制となる9世紀半ばから、律令政府は直接統治から在地蝦夷勢力を生かした間接統治へ移行したと考えられ、その時期以降、竪穴建物を中心とした集落が、平野部を中心に拡大する。竪穴建物の規模は均質化し、重複するものやカマドの作り替えが多くみられるようになる。向中野遺跡で発見された水辺祭祀跡や、下永林遺跡の円形周溝（墳丘墓）群、9世紀以降の盛南地区遺跡群の飯岡才川遺跡、飯岡才川遺跡の円形周溝群と火葬骨を埋納した骨蔵器、乙部野遺跡の火葬骨蔵器など、集落だけではなく機能も継続して見られる。また、9世紀後葉から10世紀中葉にかけて、大型竪穴建物を擁する拠点的な集落が発生する。飯岡才川遺跡では微高地の斜面に沿って総柱の掘立柱建物が東西に並立し、倉庫群が存在したと考えられる。大宮北遺跡や林崎遺跡、細谷地遺跡、大島遺跡などでは、官衙的な掘立柱建物が計画的に配置されたり、石帯具など律令制関連遺物や仏教祭祀的な遺物等が出土したりするなど、在地有力者拠点が形成された。

10世紀後半には、岩手県域において古代城柵の統治範囲を受け継いだ在地有力者の中から、胆沢城の統治を基盤とした安倍氏が矢野以北の奥六郡を制した。やがて源氏や清原氏との前九年合戦や後三年合戦を経て、11

～12世紀にかけては、北東北は平泉藤原氏に統治された。11～12世紀の本地域の様相ははっきりしないが、大宮遺跡の大溝跡からは12世紀末～13世紀初頭頃のかわけが大量に廃棄された状況で出土し、在地勢力拠点が営まれていた可能性がある。

中世13世紀後半には、台太郎遺跡において不整五角形の堀を巡らす居館が営まれ、周辺には土城墓群や宗教施設と考えられる遺構が確認されており、出土遺物から15世紀頃まで在地領主が存在したと考えられる。また、向中野館遺跡や矢盛遺跡でも、16世紀を中心とする掘立柱建物跡や堀跡が確認され、在地領主の居館跡が存在したと考えられる。室町時代から戦国時代は、斯波氏と南下してくる南部氏の衝突が激しく、各地に城館が営まれた。

その戦いを制した南部氏は盛岡城を築城し、現在の盛岡の町並みの礎を整備したとされる。本遺跡の東には奥州道中（街道）が整備され、本地域は農地に集落が点在する農村地帯となる。各遺跡からは曲屋などの掘立柱建物跡や井戸跡、盛南地区遺跡群の南仙北道跡からは道路側溝跡が確認されている。幕末から近世初頭の古絵図には、その様子が記されている。

その景観は、昭和初期まで大きく変わることはなかったことが第2次大戦後の米軍による空中写真からもうかがえる。この地域の様相が現在の姿に変容するのは、昭和30年代以降に実施された圃場整備や、周辺の宅地開発、道路整備、東北新幹線の開通などが進められたことによる（第1図版）。

【参考文献】

- 盛岡市・盛岡市教育委員会 各年度『盛南地区遺跡群発掘調査報告書Ⅰ～ⅩⅢ』盛岡市遺跡の学び館
 盛岡市遺跡の学び館 2004『陸奥国最前線-志波城と北の蝦夷たち-』第1回企画展展示図録
 盛岡市遺跡の学び館 2006『黄泉への入口-古代蝦夷首長の墓-』第5回企画展展示図録
 盛岡市遺跡の学び館 2007『まちづくりと考古学-盛南開発と遺跡発掘調査-』第6回企画展展示図録
 盛岡市遺跡の学び館 2017『志波城前夜の蝦夷社会—9世紀初頭以前の盛南地区—』第15回企画展展示図録
 盛岡市教育委員会編 2016『志波城跡と蝦夷（エミシ）』盛岡市文化財シリーズ第43集
 盛岡市教育委員会 2021『大島遺跡発掘調査報告書』盛岡市遺跡の学び館
 有限会社タイキ・盛岡市教育委員会 2021『荒屋遺跡-第5次調査宅地造成に伴う発掘調査報告書-』



1948年(昭和23年)米軍撮影



2008(平成20年)国土地理院撮影

(国土地理院ウェブサイト空中写真データより作成)

第1図版 遺跡周辺の空中写真比較

3 これまでの調査 (第1表、第4図)

見前中島遺跡では、試掘調査を含む発掘調査を3回、工事立会調査を12回実施している。第2次調査において遺構遺物を確認したため、第3次調査にて本調査を実施した。第1次調査と立会調査においては、遺構遺物を確認できていない。

第1表 見前中島遺跡発掘調査実績

遺跡	略号	次数	年度	調査方法	所在地 盛岡市	面積 (㎡) (調査対象)	調査期間	遺構・遺物	調査原因	調査	報告書
見前中島	I M N	1	H 5	試掘	西見前 14 地割 99-100、100-1	228 (1,931)	1993.12.24	なし	宅地 造成	盛岡市 教委	年報
		2	R 4	試掘	西見前 14 地割 70 番ほか	425 (4,052.48)	2022.4.12	竪穴建物跡、溝跡、土坑	宅地 造成		本書
		3	R 4	本調査		3,175.7 (4,052.48)	2022.6.1 ~ 同 8.10	平安時代：竪穴建物跡 1、溝跡 6 古代以降：掘立柱建物跡 1、土坑 2、 溝跡 7、小ピット、風倒木跡			

(H：平成、R：令和)



第4図 見前中島遺跡 全体図

第3章 調査成果

1 調査の方法

(1) 第2次調査（試掘調査）

遺跡中央に位置する届出範囲全面 4,052.48m²に対し、遺構有無、遺構密度、遺構検出面までの表土の厚さなどを確認するため、7ヶ所に試掘溝（トレンチ）を設定し、法面バケツ付バックホーで表土を除去し遺構検出をする試掘調査を実施した。現況は水田であった。

(2) 第3次調査（本調査）

第2次調査の試掘調査結果を受け、本発掘調査を実施した。

法面バケツ付バックホーにて表土を除去し、ジョレンで遺構検出作業を行った。遺構検出面の標高は110.1～110.3mほどで、緩やかに西から東に向かって傾斜する。北西部は褐色シルト層、南～南東部は黒色土や粘土質土であった。

平面位置は、平面直角座標系（世界測地系）第X系に即した調査座標原点を設定し表示した。調査座標原点は、X-39,600 m、Y+28,400 mを、調査座標原点 RX ± 0、RY ± 0 とした。高さは近隣の測量成果からレベルワークし、標高値を使用した。

竪穴建物跡内は、土層観察用ベルトを境に、方位をあらわしたエリア（例：南東側＝SE区）及び層位ごとに遺物を取り上げた。特徴的な遺物や床面出土遺物は、番号をふり、出土状況の図化と写真撮影後に取り上げた。検出面や溝跡の遺物は、座標値を元にした2mグリッドで位置を記録し取り上げた。遺構は堆積層ごとに底面まで掘り下げ、土層観察用ベルトの図化及び写真撮影の後、完掘し平面図化、写真撮影をした。溝跡は、一部掘り上げず検出状況のみを図化等記録した。各遺構精査、図化、写真撮影後、全景空中写真撮影、調査区全体図を実測した。

本調査区西側の現道路部分は、水道配管工事や道路築造工事に立ち会い、遺構遺物の有無を確認したが、既存下水配管などにより検出面が大きく破壊されており、遺構遺物は確認できなかった。

2 基本層序（第2表）

本遺跡は栗石川と北上川の影響を強く受けた不安定な低位沖積段丘上にあり、水成砂礫層（V層）が基底をなす。その上に水成シルト層（IV層）が乗り、一部にシルト漸移層（III層）が残存し、表土（I・II層）がそれらを覆っている。

今次調査区は、河川堆積による褐色シルト層（IV層）が厚く堆積しており、遺構検出作業は表土（I・II層）直下のIV層上面、一部III層が残存している地点はIII層上面にて行った。

第2表 見前中島遺跡第3次調査 基本層序

I・II層（表土）	腐植土や黒色土からなる表土。黒～黒褐色を呈する耕作土や攪乱等。
III層（シルト漸移層）	I・II層の表土とIV層シルト層の中間の層で、黒褐色～暗褐色を呈する。調査区内の一部に残存。
IV層（シルト層）	水成シルト層で、褐～黄褐色を呈する。層中に黒褐色土層が介在することもある。地点により層相や層厚は一定していない。
V層（砂礫層）	基底をなす水成砂礫層または粘土層。砂の精粗、礫の量や大きさで、数層に細分される。

3 遺構・遺物

(1) 第2次調査(第4・5図)

試掘調査の結果、既設水路の北側から、竪穴建物跡、土坑、溝跡を検出した。既設水路の南側は、遺構が存せず黒色土が堆積した低地だった。

(2) 第3次調査(第5～12図・第2～5表・第2～5図版)

第3次調査区は遺跡の中央部に位置し、第2次調査結果を受け本調査を実施した。調査の結果、遺構検出は開田等により大きく削平を受けていたが、平安時代の竪穴建物跡1棟(RA01)、中～近世の掘立柱建物跡1棟(RB01)、土坑1基(RD01)、溝跡13条(RG01～13)を検出した。遺構外の表土中及び遺構検出面から、遺物が出土した。なお、既存水路南側(南1・2区)は黒色土が堆積し、遺構は確認されなかった。

竪穴建物跡(RA)

RA01(第6・12図、第4・5表、第4・5図版)

位置 RX-98、RY+82 重複関係 RB01と重複し、古い。 平面形 隅丸方形
規模等 西側を掘削に壊されるが平面5.1×4.65m、検出面から床の深さは0.02～0.08mを測る。
カマド方向 E38°S カマド 南東壁の北東隅。上部は削平。北袖と火床面の焼土は検出されなかった。南袖は褐色土で構築。煙道の規模は、長さ1.0m、幅0.3m。底面は煙出し部が低く傾斜する。燃焼部北奥から、あかやき土器の底部から体部下部分が、倒立状態で出土した(土器1)。この土器は、外面に被熱痕跡があり、内部に充填された土が熱を受け焼土化し、体部と口縁部はカマド付近の床面や埋土から出土したことから、支脚として使われていたものが、本竪穴建物廃棄時に原位置から動かされ、体部上半を壊し、再設置された可能性がある。床面 カマド前から中央付近に硬化範囲を確認。竪穴掘り方は、壁際が中央より深く、L1とL2層によって平坦な床面を構築している。床面直上及びカマド前から建築部材の一部と考えられる炭化材が出土。樹種はケヤキとコナラである(第4章参照)。埋土 全面が削平掘削され、遺構検出時に確認した黒褐色土は、床面直上に堆積するB層である。炭粒が微量に含まれる。カマド付近にのみ、暗褐色土を主体とするA層が堆積。ピット 4口。主柱穴と考えられる。径0.4～0.7m。床面から底部の深さ0.14～0.34m。Pit1と2はB層 類似の黒褐色土が主体。Pit4はL1層(構築土)除去後に検出。底面に柱あたりが認められる。遺物(第12図) 1は、あかやき土器の甕である。カマドから倒立状態で出土。同一個体である体部と口縁部も、カマド周辺から出土。底面は欠損しているが残存部から平底と考えられる。体部は寸胴で、頸部から大きく外反し口縁が受け口状になる。最大径は口縁部。ロクロ成形後、外面に平行文のタタキ、体部より下はヘラケズリ。その他に、土師器甕の小破片が数点出土。床面直上及びカマド前から出土した炭化材は年代分析をした(第4章参照)。 時期 平安時代、9世紀前葉～中葉

掘立柱建物跡(RB)

RB01(第7図、第4表、第4図版)

位置 RX-104、RY+84 建物方向 N3°W・南北棟 重複関係 RA01と重複し、新しい
構造 桁行3間・梁行1間、間仕切りあり 規模 桁行総長7.2m(24尺)、梁行総長4.5(15尺)m。検出した掘方は10口。東辺は桁行4間で、柱間が北から2.4m(8尺)・2.4m(8尺)・1.5m(5尺)・0.9m(3尺)。西辺は桁行3間で、柱間が北から1.8m(6尺)・3.0m(10尺)・2.4m(8尺)。南辺と北辺は梁行1間で、柱間が4.5m(15尺)。全体的に削平を受けており、掘方の浅い施設は確認できなかった。
付属施設 北部に黒褐色土と褐色土による土間たたき状の不整形の整地面。南東隅0.9m(3尺)に検出した柱穴は下屋の可能性があり。 出土遺物 なし 時期 中～近世か

土坑 (RD)

RD 01 (第7図、第4表)

位置 RX-81、RY+79 重複関係 なし 平面形 不整形 規模等 平面 1.0 × 0.96m、検出面から底面までの深さ 0.22 m を測る。底面は、概ね平坦で壁は外傾する。 埋土 黒褐色土が主体。
出土遺物 なし 時期 埋土の状況から古代以降と考えられる。

溝跡 (RG) (第5・8～10・12図、第3・4・5表、第2～5図版)

規模や遺構間新旧関係は「第3表 溝跡一覧表」、埋土は「第4表 土層観察表」に詳述した。

RG 01

位置・走向 北調査区北西側から南へ蛇行して延びる。RX-94/R Y+95 付近で RG11 と分岐。南側調査区域外へ延びる。 重複関係 RG02、03、06、10 と重複し新しい。
出土遺物 なし 時期 重複関係から、古代以降と考えられる。

RG 02

位置・走向 調査区北西から東南東へ延び、RX-89/R Y+104 付近で消滅。
重複関係 RG03、04、05、08 と重複し、新しい。RG01、06 と重複し、古い。
出土遺物 なし 時期 重複関係から、古代以降と考えられる。

RG 03

位置・走向 北調査区北西側から南南東へ延び、RX-84 付近で南東へ曲がり、南調査区域外へ延びる。RG04 と並行する。 重複関係 RG01、02、05、06、10 と重複し、古い。 出土遺物 なし
時期 重複関係と検出状況から平安時代と考えられる。

RG 04

位置・走向 北調査区北西側から南走、RX-82 付近で南東へ、南東調査区域外へ延びる。RG03、07 と並行。
重複関係 RG12 と重複し、新しい。RG02、05 と重複し、古い。
埋土 最上層 A 1 層から十和田 a 火山灰 (To-a) が出土 (第4章参照)。
出土遺物 土師器の環や甕と考えられる小破片が出土している。
時期 重複関係と、出土遺物、十和田 a 火山灰の堆積から、平安時代と考えられる。

RG 05

位置・走向 RX-80/R Y+93 付近から南東へ延び、RX-106/R Y+105 付近で消滅。 重複関係 RG03、04 と重複し新しい。RG02 と重複し古い。 出土遺物 北側の検出面から、整形された砥石 (第5表、第12図9、第8図版9) が出土。上下欠損しているが、断面は長方形で小型のものである。その他、土師器の環や甕と考えられる小破片が出土。 時期 遺構の重複関係や出土遺物から平安時代以降と考えられる。

RG 06

位置・走向 北西調査区域外から東走し、RX-78/R Y+89 付近で消滅。 重複関係 RG02、03 と重複し、新しい。RG01 と重複し、古い。 出土遺物 なし 時期 重複関係から、平安時代以降と考えられる。

RG 07

位置・走向 北調査区域外から南西へ、RX-76 付近で南東に曲がり南東調査区域外へ延びる。RG04 と並行する。 重複関係 RG08 と重複し、新しい。 埋土 A1 層に十和田 a 火山灰 (To-a) と見られた灰白色火山灰が出土 (年代指標とはならない。第4章2参照)。 出土遺物 須恵器大甕の体部 (第5表、第12図2、第5図版2) が出土。色調は内外面灰色で胎土は赤褐色。タタキ・アテグ共に平行文。このほか埋土中から、内面黒色処理された土師器の環の小破片が出土。また、A 層から炭化材の小片が出土した。科学分析の結果クワリ材で、縄文時代晩期のもの (第4章参照) である。地山 II～IV 層からの流入が想定される。
時期 重複関係や出土遺物などから平安時代と考えられる。

RG 08

位置・走向 RX-76/Ry+98 付近から南西へ、RX-82 付近から屈曲し調査区域外へ延びる。

重複関係 RG13 と重複し、新しい。RG02、07 と重複し、古い。 付属施設 RX-90/Ry+105 付近から東の底面や壁面から 4 口のピットを検出。遺構検出時には認められず溝に付属する。径は 0.23 ～ 0.38m。出土遺物 Pt3 埋土から炭化材小片が出土。科学分析の結果クリ材で、縄文時代晩期のもの（第 4 章参照）である。地山Ⅱ～Ⅳ層からの流入が想定される。

時期 遺構の重複関係や埋土状況から、平安時代と考えられる。

RG 09

位置・走向 RX-86/Ry+83 付近から南東へ、RX-99/Ry+96 付近で消滅する。

重複関係 RG10 と重複し、古い。 出土遺物 なし 時期 重複関係から、古代以降と考えられる。

RG 10

位置・走向 RX-94/Ry+95 で RG01 から分岐南走し、南調査区域外へ延びる。 重複関係 RG03 と重複し、新しい。RG11 と重複し、古い。 出土遺物 なし 時期 重複関係から古代以降と考えられる。

RG 11

位置・走向 RX-95/Ry+89 から南東へ、RX-114/Ry+104 付近で消滅する。

重複関係 RG10 と重複し、新しい。 出土遺物 なし

時期 重複関係から、古代以降と考えられる。本調査区域内から検出した溝跡の中で最も新しい。

RG 12

位置・走向 RX-120/Ry+119 から南走し、RX-125/Ry+123 付近で消滅する。 重複関係 RG04 と重複し、古い。 出土遺物 なし 時期 重複関係から、平安時代またはそれ以前と考えられる。

RG 13

位置・走向 RX-91/Ry+103 付近から南東へ、RX-99/Ry+109 付近で消滅する。 重複関係 RG08 と重複し、古い。 出土遺物 なし 時期 重複関係から、平安時代またはそれ以前と考えられる。

風倒木跡（第 5・9・10 図、第 4 表、第 5 図版）

位置 北調査区南東 平面形 不整形 規模等 長軸 3.8m、短軸 3.4m。底面までの深さは、出土した木根を取り上げた部分の最下面で、検出面から 0.7m。 重複関係 周辺に堆積している旧低地と考えられる黒色土範囲より新しい。 埋土 遺構検出面から 0.5m 程下からの湧水が著しい。A 層は粘性があるグライ化した土であった。南北方向の確認トレンチで、黒褐色土と基本層序の下位層である明黄褐色土が垂直気味に層界を形成していることと、黒色土と明黄褐色土の互層が認められたため、風倒木跡と判断した。東西の土層観察断面 A、B、C1・C2 層は、倒木後の窪地側に堆積したものと考えられ、木は南から北側に倒れたことを示唆する。 出土遺物 底面から自然木が出土。樹種同定分析の結果、樹種はコナラで、放射性炭素年代測定によれば 8 世紀後半～9 世紀半ば頃のものである（第 4 章参照）。

遺構外出土遺物（第 12 図、第 5 表、第 5 図版）

3 はあかやき土器の坏。4 はかわらけの皿か。いずれも体部～底部の、摩滅した破片資料である。5 は瀬戸美濃大窯期と考えられる蓋か。6 は白磁の破片である。7 と 8 は青磁の底部片である。7 は明緑灰色の軸で、高台内の軸薬をリング状に掻きとる蛇の目軸刺ぎが確認できる。見込みにもリング状の刺ぎが認められる。高台から高台脇にかけて砂が付着している。8 は緑灰色の軸で、畳付まで軸がかかる。高台内は露胎である。5 ～ 8 は、概ね 15 ～ 16 世紀の所産と考えられる。10 は黒色頁岩製の碁石と考えられる。直径 2.3cm の円形で、側面に面取り痕跡が認められる。表土中からの出土であり年代不詳。

第3表 溝跡一覧表

遺構名	重複関係 (新→古)	規模 (m)			走向	出土遺物	時期	その他
		幅	最大深度	検出延長				
RG01	RG01→10→06→02→03	0.4~1.5	0.22	60~	北西~南		古代以降	RG10と分岐
RG02	RG01→10→06→02→05→03. RG02→04、RG02→08	0.2~0.95	0.22	28~	北西~東南東		古代以降	
RG03	RG01→10→06→02→05→03	0.5~1.25	0.24	73.2~	北~南南東		平安時代	RG04に並行
RG04	RG02→05→04→12	0.8~1.25	0.28	72.8~	北~南東	土師器甕・環 小破片	平安時代	RG03、07に並行 十和田a火山灰
RG05	RG02→05→03、RG05→04	0.6~1.3	0.08	28.4	北~南東	磁石、土師器小破片	古代	
RG06	RG01→10→06→02→03	0.4~0.55	0.11	10.4~	北西~東		古代以降	
RG07	RG07→08	0.4~1.05	0.18	65.4~	北~南東	須恵器大甕 破片 土師器環 小破片	平安時代	RG04に並行 十和田a火山灰?
RG08	RG02→08、RG07→08→13	0.4~1.0	0.32	44.2~	北~東		平安時代以前	底面にビット4口
RG09	RG01→10→09	0.4~0.55	0.14	18.4	北西~南東		古代以降	
RG10	RG11→01→10→03	0.4~0.65	0.14	33.8~	北~南		古代以降	RG01から分岐
RG11	RG11→01→10	0.3~0.6	0.06	24.~	北西~南東		古代以降	
RG12	RG04→12	0.4~0.6	0.05	5.8	北西~南		平安時代以前	
RG13	RG08→13	0.4~0.75	0.11	9.0	北西~南東		平安時代以前	

第4表 土層観察表

遺構名	層名	主要土		含有土		状態	%	軟硬	密度	その他			
		土性	土色 (M)	土性	土色 (M)								
PA01	A1	SiC	10YR	3/4	SiC	10YR	2/2	粒~塊	10~15	中	中	壁面堆土	
	A2	SiC	10YR	3/1	SiC	10YR	2/2	塊	30	中	中		
	B	SiC	10YR	2/2	SiC	10YR	5/8	粒~塊	5~10	中	中	炭粒3%	
	J1	SiC	10YR	3/3	SiC	10YR	4/6	粒	3	中~硬	中		
	J2	SiC	10YR	4/3	SiC	10YR	3/1	塊	20	中	中		
	J3	SiC	10YR	3/3	SiC	10YR	4/6	粒	2	中	中		
	J4	SiC	10YR	4/2	SiC	10YR	4/6	粒~塊	30~40	中	中~密	焼土塊5~10%、炭粒2%	
	J5	SiC	10YR	4/2	SiC	10YR	3/2	塊	5	中	中	焼土塊5%、灰雲じり	
	J6	SiC	10YR	4/6	SiC	10YR	3/2	粒~塊	5~10	中	中	炭粒2%	
	J7	SiC	10YR	3/1	SiC	10YR	4/6	塊	20~30	中	中		
	J8	SiC	10YR	4/6	SiC	10YR	3/1	粒	3	中	中~密	下に焼土粒と被熱層	
	J9	SiC	10YR	3/3	SiC	10YR	4/6	粉	5	中	中		
	J10	SiC	10YR	4/6	SiC	5YR	5/8	焼土塊	50	中	中		
	K	SiC	10YR	4/6	SiC	10YR	2/3	粉	3	硬	密	土器内充填土、カマド構築土	
	L1	SiC	10YR	4/6	SiC	10YR	2/3	粉~粒	30	硬	密	中央付近に灰、焼土粒、人為層。	
	L2	SiC	10YR	4/6	SiC	10YR	2/3	粒~塊	20	硬	密		
	pr1	P1	SiC	10YR	2/2	SiC	10YR	4/4~4/6	粒	10	中	中	壁際に確認、人為層。
		P2	SiC	10YR	2/3~3/3	SiC	10YR	4/4	粒	10	中	中	
		P3	SiC	10YR	4/6	SiC	10YR	2/3~3/3	粉~粒	30	中	中	
	pr2	pr2	SiC	10YR	2/2~2/3	SiC	10YR	4/4	粉~粒 (径1~1.5cm)	30	中	中	
pr3		A	SiC	10YR	3/1	SiC	10YR	5/6	粉~粒	10	硬	密	
pr4	B	SiC	10YR	5/6	SiC	10YR	3/1	粉~粒	30	硬	密		
	C	SiC	10YR	3/2	SiC	10YR	5/6	粉~粒	20	硬	密		
	Q1	SiC	10YR	4/6	SiC	10YR	2/3~3/3	粉~粒(径1cm)	20	中	中~密	L1層下面で検出。人為層。	
PB01	Q2	SiC	10YR	4/6	SiC	10YR	3/3	粉~粒	10~15	中	中~密	砂礫地山崩壊土含む。人為層。 鉄(径3cm)含む。クライ化 跡あり。	
	Q3	SiC	10YR	4/2~5/2	SiC	10YR	4/6	粉~粒	50	中	中		
	1	A	SiC	10YR	3/1	SiC	10YR	5/8	粉~粒	7	硬	密	
	B	SiC	10YR	3/1	SiC	10YR	5/8	粉	5	硬	密		
2	C	SiC	10YR	3/1	SiC	10YR	5/8	粉~粒	25	硬	密		
	D	SiC	10YR	3/1	SiC	10YR	5/8	粒	10	硬	密		
	E	SiC	10YR	3/1	SiC	10YR	5/8	粒	5	硬	密		
	A	SiC	10YR	3/2	SiC	10YR	5/8	粉	5	硬	密		
	B	SiC	10YR	3/1	SiC	10YR	5/8	粉	7	硬	密		
C	SiC	10YR	5/8	SiC	10YR	3/1	粉~粒	15	硬	密			

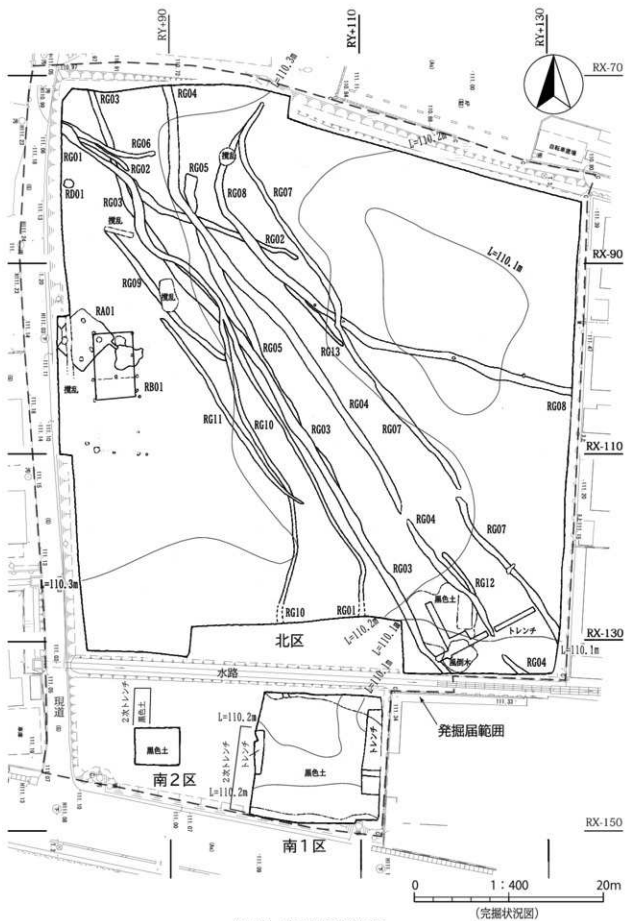
通称名	層名	主層土			含有土			状態	%	軟硬	密度	その他		
		土性	土色 (IS)	土性	土色 (IS)	土性	土色 (IS)							
RB01	4	A	SICI	10YR	5/1	SICI	10YR	5/6	粉	5	硬	密		
		B	SICI	10YR	3/1	SICI	10YR	5/6	粉～粒	7	硬	密		
		C	SICI	10YR	5/6	SICI	10YR	3/1	粒	10	硬	密		
	5	B	SICI	10YR	3/1	SICI	10YR	5/8	粉	5	硬	密		
		6	B	SICI	10YR	3/1	SICI	10YR	5/8	粉	7	硬	密	
			C	SICI	10YR	3/1	SICI	10YR	5/8	粉～粒	15	硬	密	
	D		SICI	10YR	5/8	SICI	10YR	3/1	粉～粒	20	硬	密		
	7	A	SICI	10YR	3/2	SICI	10YR	5/8	粉	10	硬	密		
		B	SICI	10YR	3/1	SICI	10YR	5/8	粉	5	硬	密		
		C	SICI	10YR	3/1	SICI	10YR	5/8	粉～粒	15	硬	密		
		D	SICI	10YR	5/8	SICI	10YR	3/1	粉～粒	20～25	硬	密		
	8	A1	SICI	10YR	3/2	SICI	10YR	5/8	粉～粒	7	硬	密		
		A2	SICI	10YR	3/2	SICI	10YR	5/8	粉	5	硬	密		
		B1	SICI	10YR	3/1	SICI	10YR	5/8	粉～粒	5	硬	密		
		B2	SICI	10YR	3/1	SICI	10YR	5/8	粉～粒	7	硬	密		
	9	C	SICI	10YR	3/1	SICI	10YR	5/8	粉～粒	15	硬	密		
		A	SICI	10YR	3/3	SICI	10YR	4/4～4/6	粉～粒	50	中	中		
			SICI	10YR	2/1～2/2	SICI	10YR	4/4～4/6	粉～粒	10	中	中		
			SICI	10YR	2/2	SICI	10YR	4/4～4/6	粉～粒	40	中	中		
	10	C	SICI	10YR	4/4～4/6	SICI	10YR	2/3～2/2	粉～粒	20	中	中～密		
		A1	SICI	10YR	3/1	SICI	10YR	5/6	粉	20	中	密		
		A2	SICI	10YR	3/1	SICI	10YR	5/6	粉～粒	10	中	密		
整理層	A	SICI	10YR	2/3	SICI	10YR	4/4～4/6	粉～塊 (径1～3cm)	40	硬	密			
							SICI	10YR	3/4	粉	20			
通称外	P1	B	SICI	10YR	3/1	SICI	10YR	5/8	粉～粒	10	硬	密		
		C	SICI	10YR	3/1	SICI	10YR	5/8	粉～粒	15	硬	密		
	P2	A1	SICI	10YR	3/1	SICI	10YR	4/6	粉～粒	5	中	中		
		A2	SICI	10YR	3/1～2/3	SICI	10YR	4/6	粉	30	中	中		
		C1	SICI	10YR	4/6～4/8	SICI	10YR	3/1	粉	30	中	中		
	P3	B	SICI	10YR	3/1	SICI	10YR	5/8	粉	5	硬	密		
		P4	A	SICI	10YR	3/2	SICI	10YR	5/8	粒	7	硬	密	
	B		SICI	10YR	3/1	SICI	10YR	5/8	粉～粒	5	硬	密		
	C		SICI	10YR	3/1	SICI	10YR	5/8	粉～粒	15	硬	密		
	D		SICI	10YR	5/8	SICI	10YR	3/2	粒	10	硬	密		
	P5	A	SICI	10YR	5/2	SICI	10YR	5/8	粒	7	硬	密		
		B	SICI	10YR	3/1	SICI	10YR	5/8	粉	15	硬	密		
		C	SICI	10YR	3/1	SICI	10YR	5/8	粉～粒	20	硬	密		
	P6	A	SICI	10YR	3/2	SICI	10YR	5/8	粒	7	硬	密		
		B	SICI	10YR	3/1	SICI	10YR	5/8	粉	5	硬	密		
		C	SICI	10YR	3/1	SICI	10YR	5/8	粉～粒	15	硬	密		
	P7	B	SICI	10YR	3/2	SICI	10YR	5/8	粉	3	硬	密		
		C	SICI	10YR	3/2	SICI	10YR	5/8	粉	7	硬	密		
	RD01	A1	SICI	10YR	2/3	SICI	10YR	4/6～4/4	粉	5	中	中		
		A2	SICI	10YR	4/6～4/4	SICI	10YR	2/3	粉	20	中	中		
	RG01	1 a	SICI	10YR	5/6	SICI	10YR	3/2	粉～塊	25	硬	密	小礫混じり	
A1			SICI	10YR	3/2	SICI	10YR	5/6	粉～粒	15	硬	密		
A2			SICI	10YR	3/2	SICI	10YR	5/6	粉～粒	7	硬	密		
A3			SICI	10YR	3/2	SICI	10YR	5/6	粉～粒	10～15	硬	密		
A4			SICI	10YR	3/2	SICI	10YR	5/4～5/6	粒～粉	10	硬	密		
A5			SICI	10YR	2/3	SICI	10YR	4/6	粉	10	中	中		
RG02	A1	SICI	10YR	3/2	SICI	10YR	5/6	粉～粒	20	硬	密			
		A2	SICI	10YR	3/2	SICI	10YR	5/6	粉～粒	10	硬	密		
		A3	SICI	10YR	3/2	SICI	10YR	5/8	粒～塊	20	硬	密		
		A4	SICI	10YR	5/8	SICI	10YR	3/2	粉～粒	5～7	硬	密		
		A5	SICI	10YR	3/3	SICI	10YR	5/8	粒～塊	20	硬	密		
		B1	SICI	10YR	5/3	SICI	10YR	5/6	粒	20	硬	密		
		B2	SICI	10YR	5/8	SICI	10YR	3/2	粉	7	硬	密		
RG03	A1	SICI	10YR	2/2～3/2	SICI	10YR	5/6～5/8	粉～粒	10～15	硬	密			
		A2	SICI	10YR	3/1	SICI	10YR	3/4	粉～粒	15～20	硬	密		
		A3	SICI	10YR	2/2	SICI	10YR	5/8	粉～粒	15	硬	密		
		A4	SICI	10YR	2/2	SICI	10YR	5/6～5/8	粉～粒	20	硬	密		
		SICI	10YR	5/3	粉～粒	5								
		A5	SICI	10YR	2/3～2/2	SICI	10YR	5/2	粒～粉	10	中	中		
		A6	SICI	10YR	3/1	SICI	10YR	5/8	粉～粒	10	硬	密		
		SICI	10YR	7/1	粒	5								
A7	SICI	10YR	3/2	SICI	10YR	5/6	粉～粒	25	硬	密	径2～6cmブロック			
				SICI	10YR	6/2	粒～塊	20						

選稱名	層名	主要土		含有土		状態	%	数値	密度	その他
		土性	土色 (JIS)	土性	土色 (JIS)					
RG03	B1	SiCI	10YR 4/4	SiCI	10YR 2/2	粒	3	硬	密	
	B2	SiCI	10YR 5/8	SiCI	10YR 3/2	粉～粒	15	硬	密	
	B3	SiCI	10YR 2/3～2/2	SiCI	10YR 5/2	粉	30	中	中	
	C1	SiI	10YR 5/6～5/8	SiCI	10YR 4/6	粉～粒	5			
	I a	SiCI	10YR 5/6	SiCI	10YR 3/1	粒～塊	20	中	中	
RG04	I a	SiCI	10YR 5/6	SiCI	10YR 3/2	塊	25	硬	密	小礫混じり
	II b	SiCI	10YR 3/2	SiCI	10YR 4/6	塊	30	硬	密	小礫混じり
	A1	SiCI	10YR 3/1～3/2	SiCI	10YR 5/6	粉～粒	10～15	硬	密	十和田 a 火山灰含
	A2	SiCI	10YR 3/1	SiCI	10YR 5/6	粒～塊	25	硬	密	
	A3	SiCI	10YR 3/3	SiCI	10YR 5/8	粉～塊	20	硬	密	
	A4	SiCI	10YR 5/8	SiCI	10YR 2/2	粒	15	硬	密	
	A5	SiCI	10YR 3/2	SiCI	10YR 5/6	粉～粒	10～15	硬	密	
	A5	SiCI	10YR 3/2	SiCI	10YR 3/6	粉～粒	7	硬	密	
	A6	SiCI	10YR 3/1～3/2	SiCI	10YR 5/6	粉～粒	15～20	硬	密	
	A7	SiCI	10YR 3/1～3/2	SiCI	10YR 5/6	粉～粒	10～15			
	B1	SiCI	10YR 5/2	SiCI	10YR 3/6	粉～粒	7	硬	密	
B2	SiCI	10YR 3/2	SiCI	10YR 2/2	粒	7～10	硬	密		
C1	SiCI	10YR 5/3	SiCI	10YR 3/2	粉～粒	10～25	硬	密		
RG05	A1	SiCI	10YR 5/8	SiCI	10YR 2/2	粒～塊	30	硬	密	
	A2	SiCI	10YR 5/8	SiCI	10YR 2/2	粒	25	硬	密	
	A3	SiCI	10YR 3/1	SiCI	10YR 5/6	粒	15	硬	密	
	A4	SiCI	10YR 3/2	SiCI	10YR 7/1	粒	10	硬	密	
RG06	A1	SiCI	10YR 5/8	SiCI	10YR 5/6	粉～粒	10			
	A2	SiCI	10YR 3/1	SiCI	10YR 6/3	粉～粒	10	硬	密	
	A2	SiCI	10YR 3/1	SiCI	10YR 3/1	粒	5	硬	密	
	A3	SiCI	10YR 3/2	SiCI	10YR 5/6	粒	20	硬	密	
RG07	A4	SiCI	10YR 3/2	SiCI	10YR 5/6	粉～粒	10	硬	密	
	A1	SiCI	10YR 3/1	SiCI	10YR 5/6	粒～塊	15	硬	密	
	A2	SiCI	10YR 3/1	SiCI	10YR 5/2	粉～粒	25	硬	密	十和田 a 火山灰? 含
	A3	SiCI	10YR 3/2	SiCI	10YR 5/6	粉～粒	20	硬	密	
	A4	SiCI	10YR 3/2	SiCI	10YR 5/2	粉～粒	5			
	A4	SiCI	10YR 3/2	SiCI	10YR 5/6	粉～粒	15	硬	密	
	A4	SiCI	10YR 3/2	SiCI	10YR 5/2	粉～粒	15	硬	密	
	B1	SiCI	10YR 3/2	SiCI	10YR 5/6	粉～粒	30			塊 5
	B2	SiCI	10YR 3/2	SiCI	10YR 6/2	粉～粒	5～10	硬	密	塊 2～3cm ブロック
	B2	SiCI	10YR 3/2	SiI	10YR 6/2	粒～塊	7～20			
RG08	I a	SiCI	10YR 3/3	SiCI	10YR 5/8	粉	3	硬	密	
	II	SiCI	10YR 3/2	SiCI	10YR 5/6	粉～粒	30	硬	密	
	III a	SiCI	10YR 5/2	SiCI	10YR 5/6	粉～粒	20	硬	密	
	A1	SiCI	10YR 3/2	SiCI	10YR 5/6	粉～粒	10～15	硬	密	
	A2	SiCI	10YR 3/2	SiCI	10YR 5/2	粉～粒	15			
	A2	SiCI	10YR 3/2	SiCI	10YR 5/6	粉～粒	7	硬	密	
	A3	SiCI	10YR 3/1	SiCI	10YR 5/6	粉～粒	10～15	硬	密	
	A4	SiCI	10YR 3/1	SiCI	10YR 5/6	粉～粒	10～15	硬	密	
	A4	SiCI	10YR 3/1	SiCI	10YR 5/2	粉～粒	5	硬	密	
	B1	SiCI	10YR 3/2	SiCI	10YR 5/2	粉～粒	20～25	硬	密	
	I a	SiCI	10YR 3/3	SiCI	10YR 5/6	粉～粒	7～10			
pit1	II	SiCI	10YR 3/2	SiCI	10YR 4/4	粉	10	中	中	
	A	SiI	10YR 5/2	SiCI	10YR 5/6	粉～粒	15	硬	密	
	B	SiI	10YR 5/2	SiCI	10YR 5/4	粉～粒	15	中	中	
pit2	B	SiI	10YR 5/2	SiCI	10YR 5/4	粒	20	中	中	
	C	SiI	10YR 5/2	SiCI	10YR 3/2	粒	5			
	A	SiCI	10YR 5/2	SiCI	10YR 5/4	粉～粒	10	中	中	
pit3	B	SiI	10YR 5/3	SiI	10YR 5/4	粒	7	中	密	
	C	SiI	10YR 5/3	SiI	10YR 2/2	粒	5	中	密	
pit4	A1	SiCI	10YR 3/1	SiCI	10YR 5/2	粒	30	中	中	
	A2	SiCI	10YR 3/1	SiCI	10YR 5/2	粒	20	中	中	
	B	SiI	10YR 3/1	SiI	10YR 3/2	粒	30	中	中	
	C	SiI	10YR 3/1	SiI	10YR 5/4	粒	10	中	中	
	C	SiI	10YR 3/1	SiI	10YR 5/2	粒	10	中	中	
pit4	A	SiCI	10YR 3/2	SiCI	10YR 5/6	粒	10	中	密	
	B	SiCI	10YR 3/2	SiCI	10YR 5/6	粒	7	中	密	
	C	SiCI	10YR 3/2	SiI	10YR 5/2	粒	7	中	密	
				SiCI	10YR 5/6	粒	3	中	密	

遺構名	層名	主要土			含有土			状態	%	数値	密度	その他
		土性	土色 (US)	土性	土色 (US)							
RG09	A	SiCl	10YR	3/1	SiCl	10YR	5/8	粉～粒	10	硬	密	
RG10	A	SiCl	10YR	3/1～3/2	SiCl	10YR	5/8	粉～粒	10～20	硬	密	
RG11	A	SiCl	10YR	3/2	SiCl	10YR	5/6	粉～粒	25	硬	密	
RG12	A	SiCl	10YR	4/2	SiCl	10YR	5/6	粉～粒	20	硬	密	
RG13	A	SiCl	10YR	3/2	SiCl	10YR	5/6	粉～粒	20	硬	密	
築部大	II	SiCl	10YR	2/2～2/3						中～硬	中～密	粘土質
	III a	SiCl	10YR	5/3						中～硬	中～密	
	III b	SiCl	10YR	3/3～3/4	SiCl	10YR	5/4	粉～粒	50	中～硬	中～密	
	A	SiCl	10YR	2/2～2/3	SiCl			酸化鉄粒～粉	30	中～硬	中～密	グライ化粘土
	B	SiCl	10YR	2/2～2/1	SiCl	10YR	2/2～2/3	粉	20	中～硬	中～密	
	C1	SiCl	10YR	1.7/1	SiCl	10YR	2/3	粉	10	中～硬	中～密	
	C2	SiCl	10YR	2/3	SiCl	10YR	1.7/1	粉	10	中～硬	中～密	
	A 9	SiCl	10YR	2/2～2/1	SiCl	10YR	3/4	粉～塊	50	中～硬	中～密	
	用別壁	I a										
II		SiCl	10YR	2/1	SiCl	10YR	3/2	粉	10	中～硬	中～密	酸化鉄含む
III		SiCl	10YR	6/3						中～硬	密	粘土、酸化鉄含む
AB		SiCl	10YR	2/2～2/3	SiCl	10YR	6/3	粉～塊	10	中	中	
A10		SiCl	10YR	2/3～2/2	SiCl	10YR	6/3	粉～塊	30	中	中	
基本層序	I a											表土
	I b											旧表土
	II											黒色
	III											暗褐色～黒シルト
	III a											灰色粘土
	III b											白色～褐色
	IV											シルト～粘土

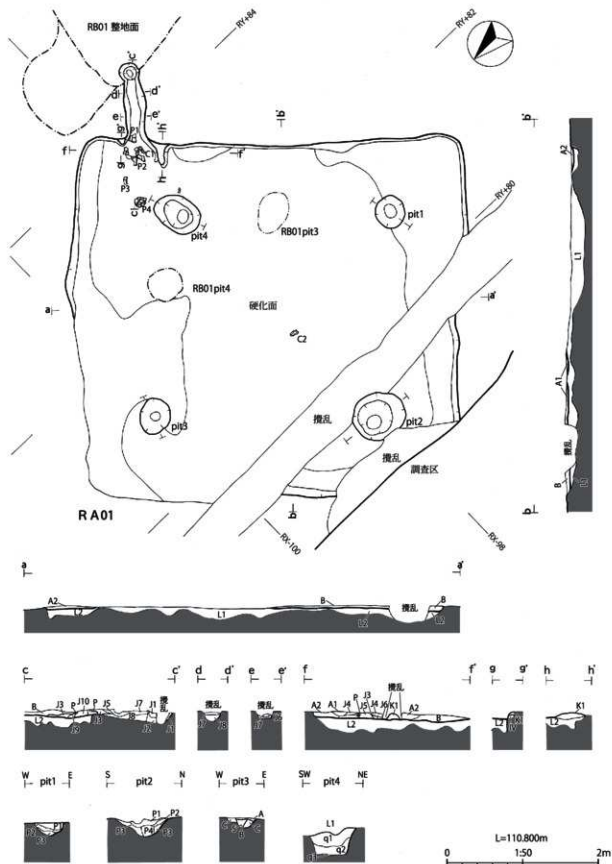
第5表 出土遺物一覧

番号	回	写真	遺構名	台帳番号	形態		出土		残存 寸法 (cm)・(残存値) (推定値)				器面調整		底面	その他	
					区分	器種	位置	層位	器高	口径	体径	底径	外面	内面			
1-1	12-1	5-1	RA01	土器 1	あがやき土器	甕	No. 2	床面	□～体		(20.2)			ロクロータタキ	ロクローヘラナテ		同一個体
1-2	12-1	5-1							体			21			ケズリ		
1-3	12-1	5-1						体～底	(10.4)			(10.7)			平底		
2	12-2	5-2	RG07	土器 2	須壺器	大甕	RX-75 RY+98	検出面	体					タタキ平行文	アテグ平行文		粘土にふし赤褐色 (白色粒、ガラス質粒含む)
3	12-3	5-3	遺構外	土器 1	あがやき土器	坏	RX-78 RY+100	検出面	体～底	(1.6)		(4.8)				糸切か	摩滅顕著
4	12-4	5-4	遺構外	土器 2	かわらけが	皿	-	検出面	体～底	(1.4)		(5.6)					摩滅顕著
5	12-5	5-5	遺構外	陶磁器 1	陶磁器	蓋か	-	検出面	体								大塚 1 期
6	12-6	5-6	遺構外	陶磁器 10	陶磁器	-	-	表土	体								白磁
7	12-7	5-7	遺構外	陶磁器 2	陶磁器	碗	-	検出面	体～底								青磁
8	12-8	5-8	遺構外	陶磁器 3	陶磁器	碗	-	表土	体～底								青磁
9	12-9	5-9	RG05	石製品 2	石製品	砥石	RX-80 RY+92	検出面		長 (6.8)	幅 2.9	厚 0.9					凝灰岩
10	12-10	5-10	遺構外	石製品 3	石製品	礫石か	表土中			長 2.3	幅 2.3	厚 0.5					黒色

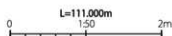
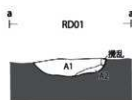
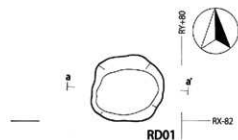
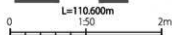
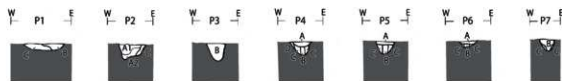
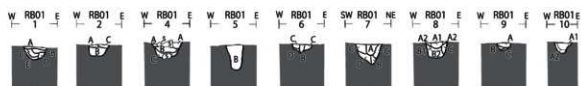
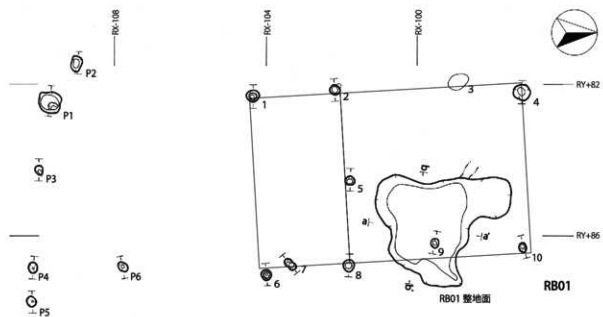


第5図 第3次調査全体図

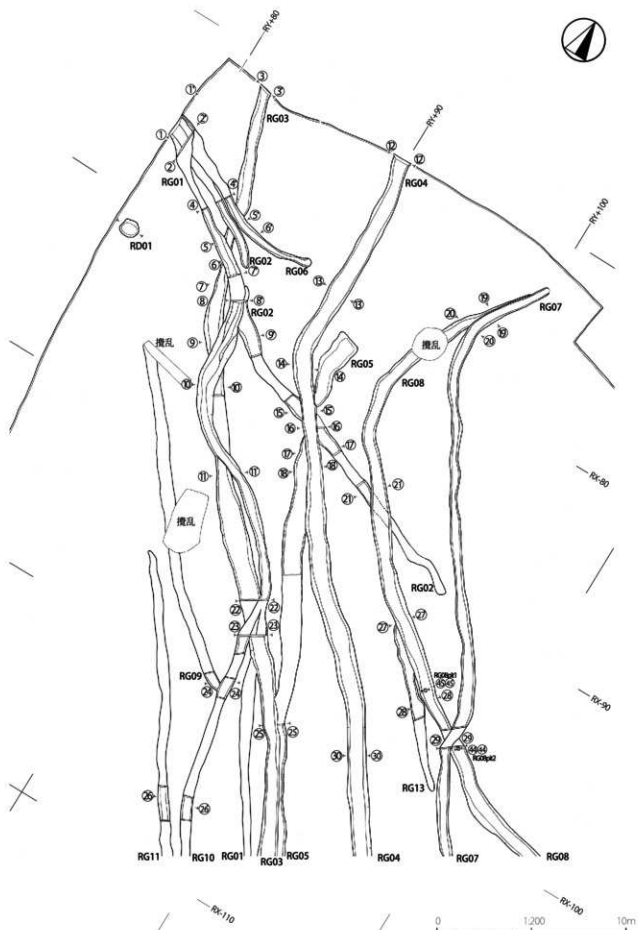
(完掘状況図)

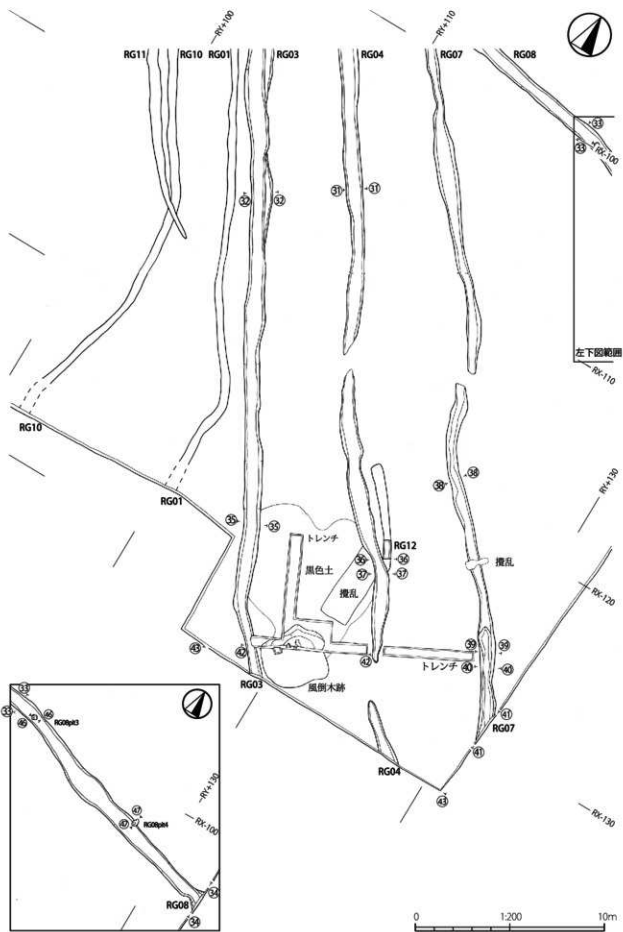


第6図 RA01 竪穴建物跡

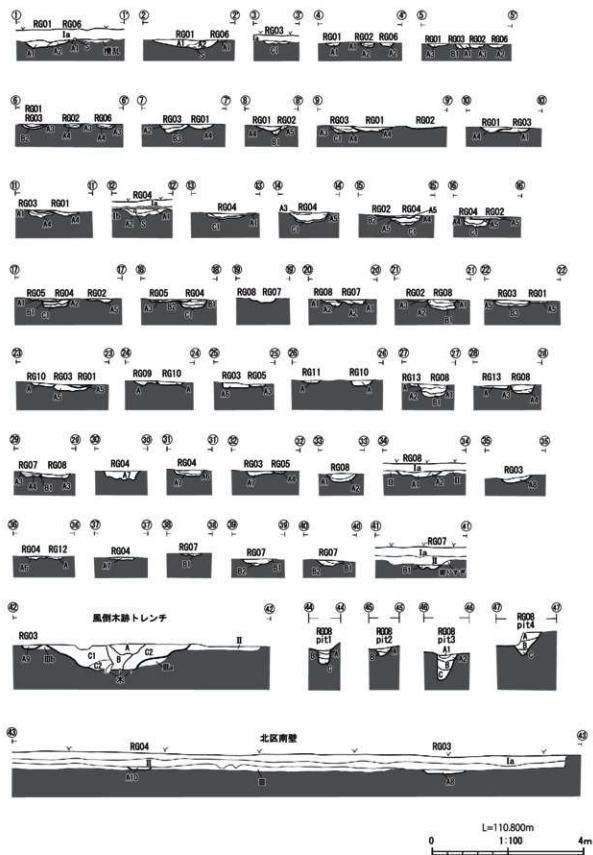


第7図 RB01 掘立柱建物跡・グリッドピット・RD01 土坑

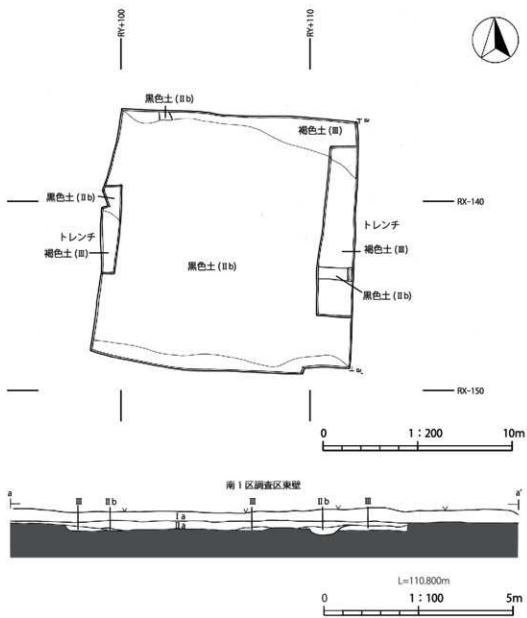




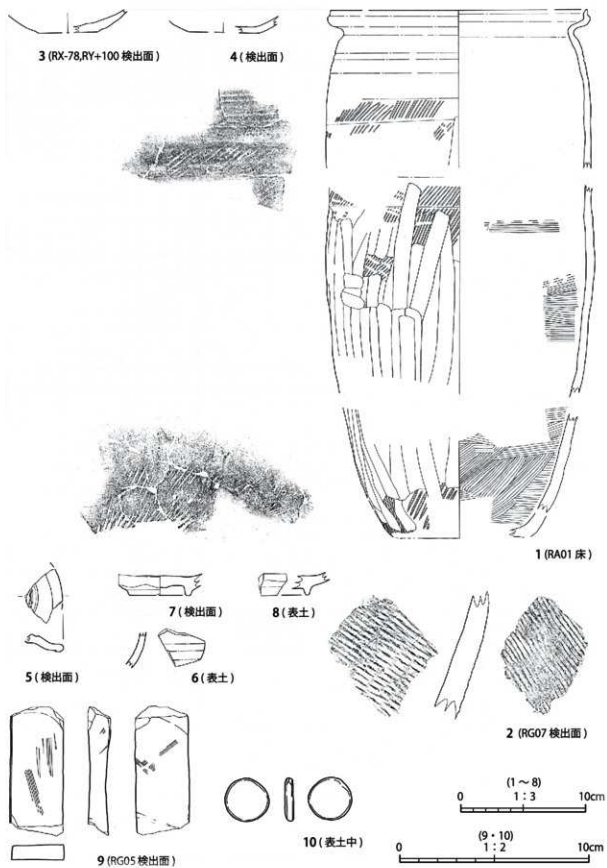
第9図 北区(2)



第10図 北区(3)



第11図 南1区



第 12 図 出土遺物

第4章 科学分析

株式会社 加速器分析研究所

岩手県盛岡市に所在する見前中島遺跡（第3次調査）出土試料を対象に自然科学分析を実施した。以下、放射性炭素年代測定、樹種同定、火山灰同定の順に報告する。

1 放射性炭素年代測定

(1) 測定対象試料

測定対象試料は、竪穴建物跡等の遺構から出土した炭化材4点と、風倒木の木材（生）1点の合計5点である（第6表）。なお、これらの同一試料を対象に樹種同定が実施されている（本稿2参照）。炭化材4点が出土した遺構は9～10世紀と推定されている。

(2) 化学処理工程

- ①メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。
- ②酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と第6表に記載する。
- ③試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。
- ④真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- ⑤精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- ⑥グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

(3) 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOX II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(4) 算出方法

- ① $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第6表）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- ②¹⁴C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（OyrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第6表に、補正していない値を参考値として第7表に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- ③pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい（¹⁴Cがが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を第6表に、補正していない値を参考値として第7表に示した。
- ④暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（ $1\sigma = 68.3\%$ ）あるいは2標準偏差（ $2\sigma = 95.4\%$ ）で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、

下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20較正曲線(Reimer et al. 2020)を用い、OxCalv4.4較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定の較正曲線、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第7表に示した。暦年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

(5) 測定結果

測定結果を第6・7表に示す。

RA01 竪穴建物跡出土試料1、2の¹⁴C年代は、試料1が1220 ± 20yrBP、試料2が1240 ± 20yrBPである。暦年較正年代(1σ)は、試料1が786 ~ 876cal AD、試料2が703 ~ 827cal ADの間に各々2つの範囲で示される。同じ竪穴建物跡のカマドと床面から出土した試料が近い年代値を示し、推定される遺構の時期とも一致する結果となった。

RG07 出土試料3、RG08 出土試料4の¹⁴C年代は、試料3が2880 ± 20yrBP、試料4が2990 ± 20yrBPである。暦年較正年代(1σ)は、試料3が1110 ~ 1014cal BCの範囲、試料4が1265 ~ 1132cal BCの間に3つの範囲で示され、試料3が縄文時代晩期前葉頃、試料4が晩期初頭頃に相当する(小林編 2008、小林 2017)。推定される時期に対して大幅に古い年代値となっており、古い層から混入した可能性などを含め検討を要する。

風倒木試料5-1の¹⁴C年代は1240 ± 20yrBP、暦年較正年代(1σ)は705 ~ 827cal ADの間に2つの範囲で示される。試料2とはほぼ同年代となった。

今回測定された試料のうち、炭化材1~4には樹皮が確認されず、生の木片5-1には樹皮が認められた。このため、炭化材については以下に記述する古木効果を考慮する必要がある。

樹木の年輪の放射性炭素年代は、その年輪が成長した年の年代を示す。したがって樹皮直下の最外年輪の年代が、樹木が伐採され死んだ年代を示し、内側の年輪は、最外年輪からの年輪数の分、古い年代値を示すことになる(古木効果)。今回測定された試料のうち、炭化材4点には樹皮が確認されていないため、試料となった木が死んだ年代は測定された年代値よりも新しい可能性がある。

試料の炭素含有率はすべて50%を超える適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

2 樹種同定

(1) 試料

分析試料は、炭化材4点と生材1点の計5点である(第8表)。なお、これらと同一試料を対象に放射性炭素年代測定が実施されている(本稿1参照)。

(2) 分析方法

炭化材は、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の各切片を作成し、双眼実体顕微鏡や電子顕微鏡で観察する。生材は剃刀を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の各切片を作成し、生物顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察する。

木材組織の種類や配列の特徴を、現生標本や森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler 他(1998)、Richter 他(2006)を参考にし、また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にし、

(3) 結果

結果を第8表に示す。検出された試料はいずれも広葉樹であり、ケヤキ(試料1)、コナラ亜属コナラ節(試料2、

表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正値)

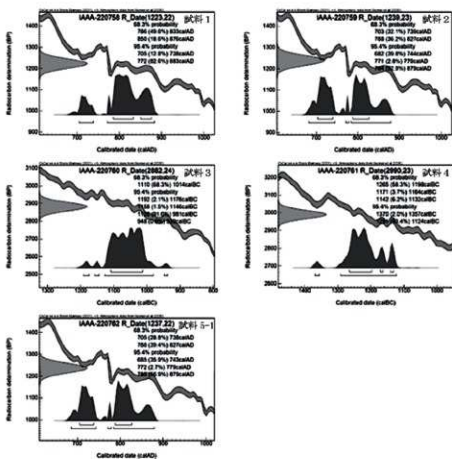
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-220758	1	RA01 壁穴建物跡 カマド C・No.1 J層	炭化材	AAA	-28.13 ± 0.24	1,220 ± 20	85.88 ± 0.24
IAAA-220759	2	RA01 壁穴建物跡 SW 床面	炭化材	AAA	-24.36 ± 0.29	1,240 ± 20	85.70 ± 0.25
IAAA-220760	3	RG08 A層	炭化材	AaA	-23.89 ± 0.27	2,880 ± 20	69.85 ± 0.21
IAAA-220761	4	RG09 pit18 埋土	炭化材	AaA	-24.38 ± 0.25	2,990 ± 20	68.91 ± 0.20
IAAA-220762	5-1	風呂木 埋土最下層	木片	AAA	-27.11 ± 0.27	1,240 ± 20	85.73 ± 0.24

[IAA 登録番号: #B535]

表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-220758	1,270 ± 20	85.32 ± 0.24	1,223 ± 22	786calAD - 833calAD (49.6%) 850calAD - 876calAD (18.6%)	705calAD - 738calAD (12.8%) 772calAD - 883calAD (82.6%)
IAAA-220759	1,230 ± 20	85.81 ± 0.24	1,239 ± 23	703calAD - 739calAD (32.1%) 788calAD - 827calAD (36.2%)	682calAD - 744calAD (39.8%) 771calAD - 779calAD (2.8%) 784calAD - 879calAD (52.9%)
IAAA-220760	2,860 ± 20	70.01 ± 0.21	2,882 ± 24	1110calBC - 1014calBC (68.3%)	1192calBC - 1176calBC (2.1%) 1158calBC - 1146calBC (1.5%) 1128calBC - 981calBC (91.0%) 948calBC - 939calBC (0.9%)
IAAA-220761	2,980 ± 20	69.00 ± 0.20	2,990 ± 23	1265calBC - 1198calBC (58.3%) 1171calBC - 1164calBC (3.7%) 1142calBC - 1132calBC (6.2%)	1370calBC - 1357calBC (2.0%) 1291calBC - 1124calBC (93.4%)
IAAA-220762	1,270 ± 20	85.35 ± 0.23	1,237 ± 22	705calAD - 738calAD (28.8%) 788calAD - 827calAD (39.4%)	685calAD - 743calAD (35.9%) 772calAD - 779calAD (2.7%) 785calAD - 879calAD (56.9%)

[参考値]



第13図 暦年較正年代グラフ (参考)

5-1)、クリ(試料3、4)である。以下に検出された種類の解剖学的特徴を述べる。

- ・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属
環孔材で、孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。
- ・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*) ブナ科
環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。
- ・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属
環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～6細胞幅、1～50細胞高。

(4) 考察

検出された炭化材は建物などの遺構から検出され、建物構築材や燃料材などに由来すると思われる。クリは、重硬な木材であり、水湿に強く、建物の柱材などの構造材に多用される。その他、家具、建具、屋根、器具等様々な用途で使われる他、火持ちが良いことから薪炭材としても優良である。コナラ亜属コナラ節もクリと同様重硬で強度があるため、建築材や器具材、薪炭材として用いられる。ケヤキは堅く丈夫で木目が美しい良材であり、大きな木材が得やすいことから、建材、器具材、彫刻など様々な用途に用いられる。このように、クリやケヤキ、コナラ節は建物構築材としては適しており、主要な構造材として使われていた可能性がある。さらに、クリやコナラ節は燃料としても良材である。

クリは、コナラ節やクスギ節などと共に人里に多い樹木で、里山林を構成する。里山林は、適度な伐採や粗朶の取替などが行われることにより維持管理される森林(二次林)で、萌芽による更新が容易な闊樹で構成される。当時の遺跡付近にはこのような二次林が存在し、そこから木材を得ていた可能性がある。また、ケヤキは、里山林にも多くみられるほか、多湿を好むため河原などにも生育する。このような森林が遺跡の近くに存在した可能性があるため、比較的得やすい木材であったと考えられる。

炭化材が出土した遺構は9～10世紀と推定され、県内の平安時代前後の住居出土炭化材を木製品用材データベース(伊東・山田,2012)でみると、クリやコナラ亜属(コナラ節、クスギ節)が非常に多く、ケヤキも散見されることから、これまでの結果と調和的である。ただし、クリに同定された試料3、4は縄文時代晩期の年代値を示しており(本稿1参照)、注意を要する。

一方、生材の風倒木は、コナラ亜属コナラ節であった。先述したように、遺跡周辺に生育していたと推定される樹木であることから、調和的な結果である。

第8表 樹種同定結果

試料名	遺構	位置	層位	性状	種類
1	RA01 竪穴建物跡	カマドC・No.1	J層	炭化材	ケヤキ
2	RA01 竪穴建物跡	SW	床面	炭化材	コナラ亜属コナラ節
3	RG07		A層	炭化材	クリ
4	RG08 Pit3		埋土	炭化材	クリ
5-1	風倒木		埋土最下層	生材	コナラ亜属コナラ節

3 火山灰同定

(1) 試料

試料は、溝跡の覆土から採取された火山灰（テフラ）とされる堆積物 2 点である。遺構名等の詳細は分析結果を提示した第 9 表に併記する。

試料の外観は、試料 6 は白色を呈する砂質シルト、試料 7 が黄褐色を呈する砂質シルトである。

(2) 分析方法

試料約 20 g を蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の 3 タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

さらに軽石または火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤 (1995) の MAIOT を使用した温度変化法を用いた。

(3) 結果

結果を第 9 表に示す。

試料 6 には中量の軽石と少量の火山ガラスが認められた。軽石は、最大径約 1.8mm、白色を呈し発泡良好のものと白色を呈し発泡やや良好のものが混在する。火山ガラスは、無色透明の軽石型である。

試料 7 には極めて微量の火山ガラスが認められた。火山ガラスは、無色透明の軽石型である。また、処理後の砂分中には径 1mm 前後の黒色を呈する不定形の酸化鉄塊が少量認められた。

試料 6 の軽石の屈折率および試料 7 の火山ガラスの屈折率を第 14 図に示す。試料 6 の軽石のレンジは $n_{1.503}$ - 1.508 であり、モードは $n_{1.507}$ である。試料 7 の火山ガラスのレンジは $n_{1.497}$ - 1.509 であり、モードは $n_{1.497}$ のようにも見えるが、レンジの広さを考慮すると不明瞭である。

(4) 考察

試料 6 は、細粒の軽石および火山ガラスを主体とするテフラである。上述した碎屑物の特徴および本遺跡の地理的位置と、これまでに研究された東北地方におけるテフラの産状（町田ほか (1981;1984)、Arai et al.(1986)、町田・新井 (2003) など）との比較から、試料は十和田 a テフラ (To-a) の降下堆積物であると考えられる。

To-a は、平安時代に十和田カルデラから噴出したテフラであり、給源周辺では火砕流堆積物と降下軽石からなるテフラとして、火砕流の及ばなかった地域では軽石質テフラとして、さらに給源から離れた地域では細粒の火山ガラス質テフラとして、東北地方のほぼ全域で確認されている（町田ほか,1981）。また、その噴出年代については、早川・小川 (1998) による詳細な調査によれば、西暦 915 年とされている。試料 6 の採取された RG05 溝跡は埋積の過程において To-a の降下堆積があったことになるから、RG04 溝跡の構築年代は、西暦 915 年より以前であった可能性が高いと考えられる。

試料 7 で検出された極めて微量の火山ガラスは、屈折率のレンジからみれば町田・新井 (2003) に記載された To-a の火山ガラスの屈折率とほぼ近い値を示す。ただし、町田ほか (1981) によれば、 $n_{1.502}$ 以下の低い屈折率の火山ガラスを主体とする火山灰層は、南方へは広がらず、十和田カルデラ周辺とその東方地域に分布が限られるとされている。実際に本分析でも、試料 6 の軽石の屈折率では低屈折率のものは認められなかった。また、試料 7 における火山ガラスの産状からは、試料 7 の採取された堆積物が火山ガラス質テフラの降下堆積物であるとは考えにくい。現時点では、試料 7 の火山ガラスは To-a に由来する可能性はあるものの、遺構の年代にかかわる指標とはならない。

第9表 テフラ分析結果

試料名	道構	位置	層位	スコリア			火山ガラス			軽石		
				量	量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径			
6	RG04 溝跡	ベルト3	A層	—	++	cl・pm	+++	W・g,W・sg			1.8	
7	RG07 溝跡		検出面	—	(+)	cl・pm	—					

凡例 —：含まれない (+)：極めて微量 ++：微量 +++：少量 ++++：中量 +++++：多量

W：白色

g：良好

cl：無色透明

sg：やや不良

b：不良

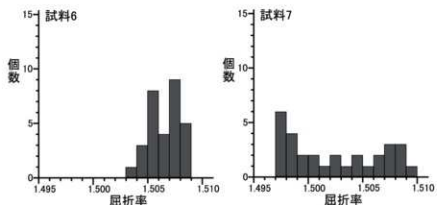
最大粒径はmm

br：褐色

bw：バブル型

md：中間型

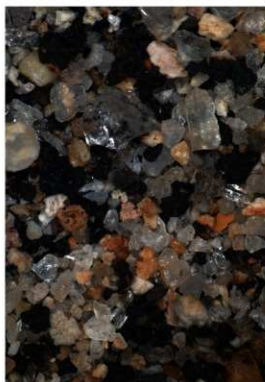
pm：軽石型



第14図 軽石・火山ガラスの屈折率



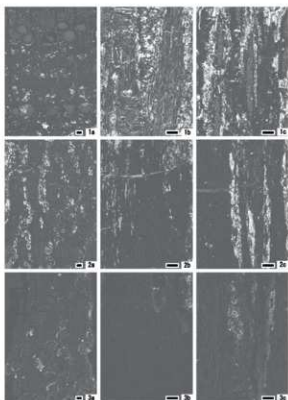
1. To-aの軽石 (RG04 ベルト3 A層; 試料6)



2. 砂分の状況 (RG07 検出面; 試料7)

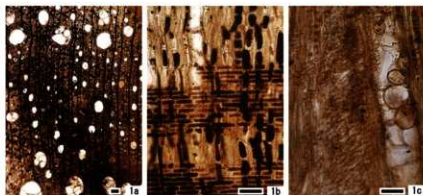
1.0mm

第15図 テフラ・砂分の状況



1. ケヤキ(試料1)
 2. コナラ亜属コナラ節(試料2)
 3. クリ(試料4)
 a:木口 b:柱目 c:板目
 スケールは100 μ m

第16図 樹種同定 炭化材



1. コナラ亜属コナラ節(試料5-1) a:木口 b:柱目 c:板目 スケールは100 μ m

第17図 樹種同定 木材(試料5-1)

【引用参考文献】

- Arai, F., Machida, H., Okumura, K., Miyachi, T., Soda, T., Yamagata, K. 1986 Catalog for late quaternary marker tephras in Japan II - Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido - Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No.21, 223-250.
- Brooks, Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon 51(1), 337-369
- 古澤明 1999 丸山ガラスの放射性半減定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌, 101, 123-133.
- 早川由紀夫・小山真人 1998 日本海をはさんで 10 世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日—和山湖と白鳥山—. 火山, 43, 403-407.
- 林昭三 1991 日本産木炭組織顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊藤隆夫 1995 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊藤隆夫 1996 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊藤隆夫 1997 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊藤隆夫 1998 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊藤隆夫 1999 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 伊藤隆夫・山田昌久(編) 2012 日本の考古学 出土水産品用材データベース. 海青社, 449p.
- 小林謙一 2017 縄文時代の末年代—土器型式編年と炭素 14 年代—, 同成社.
- 小林達雄編 2008 縄文考古学. 紀伊堂文芸出版委員会, アム・プロモーション.
- 町田洋・新井朋夫 2003 新編 火山灰リスト. 東京大学出版会, 339p.
- 町田洋・新井朋夫・森脇広 1981 日本海を渡ってきたテフラ. 科学, 51, 562-569.
- 町田洋・新井朋夫・杉原恵夫・小畑勝夫・遠藤邦彦 1984 テフラと日本考古学—考古学研究と関連するテフラのカatalog—, 渡辺隆洋(編) 古文化財に関する保存科学と人文・自然科学, 同朋舎, 365-928.
- Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon 62(4), 725-757
- Richter H.G., Grosser D., Heintz I. and Gasson P.E. (編) 2006 針葉樹材の識別. IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト. 伊藤隆夫・藤井智之・佐伯雄三・安部久・内海泰弘. (日本語監修). 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heintz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地謙・伊藤隆夫 1982 同説木材組織. 地球社, 176p.
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion Reporting of 14C data. Radiocarbon 19(3), 355-363
- Wheeler, E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編) 1999 広葉樹材の識別. IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト. 伊藤隆夫・藤井智之・佐伯雄三(日本語監修). 海青社, 122p. [Wheeler, E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

第5章 総括

1 調査のまとめ

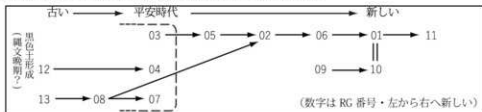
平安時代の竪穴建物跡1棟、中世以降の掘立柱建物跡1棟、古代以降の土坑1基、古代以降の溝跡13条を検出した。

RA01 竪穴建物跡は、南東壁北隅寄りに南東向きのカマドが構築されている。カマド構築位置や出土土器の特徴、カマド堆積土中と床面からの出土炭化材の放射性炭素年代測定結果から、9世紀前～中葉のものである。カマド燃焼部奥に倒立して出土したあかやき土器裏は、据え方が無く、カマド構築土が崩壊したであろう焼土や地山褐色土ブロックで覆われて出土したこと、北袖や火床面焼土が残存しないこと、体部から口縁部が周辺から出土したこと、内部に充填された土が焼土化していたことなどから、カマド機能時からそこにあったものではなく、支脚または北袖構築材として使われていたものが、本竪穴建物廃棄時に取り上げ、口縁から体部を破損した上で、この場所に再配置された可能性がある。さらに言えば、カマド廃絶儀礼（カマド納め）跡の可能性が考えられる。

RBO1 掘立柱建物跡は小規模だが、柱の間尺や周辺の出土遺物の年代から中世～戦国期のものと推察される。

溝跡は、概ね北西から南東方向へ延びる。北区南東部に検出した黒色土よりも新しい風倒木の AMS 年代測定から、黒色土は9世紀半ば以前のものである。RG07・08 出土炭化材小片の放射性炭素年代測定結果が縄文時代晩期であることから、黒色土から地山（Ⅱ～Ⅳ層）の形成年代が当該期以降といえる。RG03・04 は、この黒色土より新しいこと、RG04 の A 層に十和田 a 火山灰（915 年降灰）が堆積していることから、9世紀半ば以前のものである。RA01 竪穴建物跡カマド方向が RG03 溝跡を意識しているようにもうかがえ、同時存在の可能性もある。

溝跡群の重複関係などからの新旧関係は、第18図のとおりである。



第18図 溝跡新旧関係

2 並行する RG03-04-07 溝跡について

(1) 検出状況

調査区北西から南東へ延びる RG03・04・07 の3条の溝跡は、重複関係、出土遺物、埋土状況から、9世紀前葉から中葉の溝跡と考えられる。溝跡間隔は真芯でおおむね第10表のとおりである。検出面が削平されていることや、蛇行する部分もあり明確ではないが、おおむね5.0m前後が意識されて構築されているようにうかがえる。

第10表 溝跡間隔

位置/真芯	RG03-04	RG04-07	RG03-07
北部	5.0～7.5 m	7.5～8.3 m	12.5～13.3 m
中央	4.5～5.0 m	3.0～4.5 m	7.5～9.5 m
南部	5.0～5.5 m	5.0～6.5 m	10.0～12.0 m

(2) 官道について

『日本後紀』延暦23年5月10日条に、延暦23年(804年)、斯波城(志波城)と胆沢郡は距離が遠く往還に危険が伴うため、小路の例により駅(えき・うまや)を設置した記事がある。延暦23年までには、志波城以南に官道が設けられていたと言える。なお、この駅的位置は判明していない。

本道跡から南約3.8kmの徳丹城跡では、徳丹城機能前の先行官衙跡や徳丹城期の政庁跡より古い官道跡が見つかっている。この官道跡は、道路幅6.0m(20尺)と10.2m(34尺)を測り、南北に延びる。また、より南の紫波町鎌倉街道跡からは、10.2m(34尺)幅の平安時代のものである道路跡が見つかっている。これらは延暦23年までに整備された官道跡の一部と考えられよう。なお、志波城跡の外郭南辺から外へ延びる南外大路は、外大溝や南の一町溝を越え、志波城の中軸線に沿って幅18m(60尺)で延びるが、それ以南の城外の様相は、未調査

であり不明である。

一般に古代の官道には、緊急連絡や朝使が使う駅制(駅家・駅路)と伝制(駅所在郡や郡家に設置された駅路と結節する)がある。整備や維持管理等は地方に委ねられた。行政機関を結ぶ道であることから、古代北東北では城柵設置前に官道は整備されず、城柵設置後に城柵同士を結ぶ道が築造されたと考えられる。しかし、最後の城柵である徳丹城は、造営前の官道跡が見つまっていることから、志波城と胆沢郡を結ぶ官道や河湊の関係も考慮し、選地されたと考えられる。武部健一は、徳丹城が陸奥東山道の終点であり、志波城まで延びていた際の経路は判然としないが、徳丹城から北へ延びる道は、志波城の南の南北道路(現日県道13号盛岡和賀線)かと、どこかで北西方向の斜めの道でつながっていた可能性を指摘している(武部2004・P179)。

(3) 見前中島遺跡の溝跡群

今次調査区の溝跡群は緩やかに湾曲し、溝跡同士の間隔も厳密に一定ではない。このことから用排水のために複数回掘られた水路跡の可能性が高い。

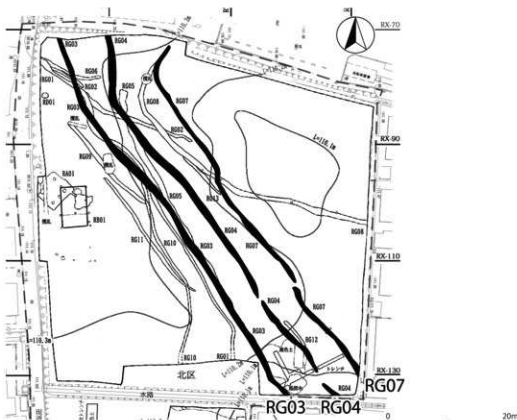
しかし、平行を基調に延びるため、道路側溝跡の可能性も排除しきれない。直線的ではないため、律令政府が造営した駅路等の官道ではない地域勢力が整備した官道に結節する道や、武部の指摘している志波城と徳丹城の官道を結ぶ道との関連の可能性が考えられよう。

なお、本遺跡南東延長には徳丹城が立地する。本遺跡の西方には、戦国時代の見前氏の居館と伝わる見前館が近接し、今次調査区内から当該期の遺物が出土した。さらに、今次調査区内溝跡群の南東延長には、昭和23年の米軍空中写真にも見える北西から南東へ延びる道が、今も存在している(第4図・第1図版・第3図版写真3)。

以上から、この溝跡群は古代以降の地方交通路や志波城と徳丹城を結ぶ道跡の一部である可能性を指摘しておく。推測の域を出ないことから、本稿ではあくまでも可能性の指摘とし、周辺の発掘調査事例の増加を待ちたい。

【参考文献】

- 近江俊秀 2013『古代道路の謎—奈良時代の巨大国家プロジェクト—』祥伝社
- 紫波町教育委員会 2014『鎌倉街道跡 第1次・第2次発掘調査報告書』
- 武部健一 2004『完全踏査 古代の道 機内・東海道・東山道・北陸道』(株)吉川弘文館
- 永田英明 2014『文献からみた古代「官道」論の課題』『国史館考古学 第6号』国史館大学考古学会
- 永田英明 1995『律令国家と「ミチ」—古代陸上交通研究の成果と課題—』『交通史研究 第35号』
- 盛岡市教育委員会 1988『志波城跡—昭和62年度発掘調査概報—』
- 矢中町教育委員会 2007『徳丹城跡 第66次・67次発掘調査報告書』、2009『徳丹城跡 第68次発掘調査報告書』



第19図 RG03-04-07 溝跡模式図



写真1 調査区全景 (正射変換・調査区接合処理画像・1/500・上が北)

第2図版 調査区全景写真(1)



写真2 調査区遠景 (上空 北から)



写真3 調査区遠景 (上空 南から)

第3図版 調査区全景写真(2)



写真4 RA01 竪穴建物跡 全景（北西から）



写真5
RA01 竪穴建物跡
カマド 全景（北西から）



写真6 RA01 竪穴建物跡 カマド構築土（北西から）



写真7 RB01 掘立柱建物跡 垂直写真（上が西）



写真8 溝跡全景（合成パノラマ・南東から）



写真9 RG04 溝跡 堆積土断面（南から）・火山灰堆積状況



写真10 溝跡全景（北西から）

第4図版 遺構(1)



写真 11 南1区全景 (北西から)



写真 12 南2区 検出状況



写真 13 近隣住民への説明会



写真 14 調査風景・風倒木出土状況



第5図版 遺構(2)・遺物

報告書抄録

ふりがな	みるまえなかじまいせき はっくつちょうさほうこくしよ							
書名	見前中島遺跡発掘調査報告書							
副書名	第3次調査 宅地造成に伴う発掘調査報告書							
編著者名	今野公顕・佐々木あゆみ							
編集機関	盛岡市教育委員会 盛岡市遺跡の学び館							
所在地	〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1 電話019-635-6600							
発行機関	盛岡市教育委員会・株式会社アスエステート							
発行年月日	2023年3月17日							
ふりがな 所収遺跡名 (略号)	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みるまえなかじまい 見前中島 遺跡 (IMN)	岩手県盛岡市 西見前第14地割 70番ほか	3201	LE 37-0098	39° 38' 30.76"	141° 9' 55.56"	第2次調査 2022年4月12日 第3次調査 2022年6月1日 ～同年8月10日	3,175.70	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
見前中島 遺跡 第3次調査	集落跡	平安時代 以降	竪穴建物跡1棟 掘立柱建物跡1棟 土坑1基 溝跡13条		平安時代 土器 (須恵器・土師器・あかやき土器) 中世以降 陶磁器片 等 合計コンテナ1箱			
要約	平安時代の竪穴建物跡や溝跡、土坑を確認し、古代以降の地域様相の一端が解明された。並行して延びる平安時代の溝跡群は、古代の道路側溝跡の可能性がある。							

見前中島遺跡発掘調査報告書

—第3次調査 宅地造成に伴う発掘調査報告書—

令和5年(2023年)3月17日

編集 盛岡市教育委員会 盛岡市遺跡の学び館
〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1
TEL 019-635-6600 FAX 019-635-6605
E-mail iseki@city.morioka.iwate.jp

発行 株式会社アスエステート
〒020-0133 岩手県盛岡市青山3丁目20番10号
盛岡市教育委員会
〒020-8532 岩手県盛岡市津志田第14地割37番地2
TEL 019-651-4111

印刷 株式会社富士屋印刷所
〒020-0841 岩手県盛岡市羽場13地割30番地10

